

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 12-2

## ほめ方・しかり方

### 目次

ほめ方・しかり方の心理学	2
<b>〔調査レポート〕ほめ方・しかり方</b>	<b>7</b>
要約	8
はじめに	12
第1部 母親調査	
・調査対象について	14
1. 子どもは思い通りに育っているか	17
2. しつけ手としての自分（母親）	19
3. どうしかっているか	21
4. どんな場合にしかるか	28
5. 両親としつけ	31
第2部 子ども調査	
1. 調査の概要	38
2. しかられ方・ほめられ方	39
3. 子どもたちの声	44
まとめ	55
<b>〔対談〕学習への動機づけ……波多野暎余夫 VS 深谷昌志</b>	<b>57</b>
・文献紹介『人はいかに学ぶか』	65
資料1 調査票見本（母親）	69
資料2 基礎集計表（母親）	76
資料3 調査票見本（小学生）	84
資料4 学年・性別集計表（小学生）	89

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# ほめ方・しかり方の心理学

東京学芸大学教授  
深谷和子

親の一日は、子どもをほめたりしかったりすることで終始する。子どもが小さいときはとくにそうである。ほめることで親は子どもに「してよい行動」を教え、しかることで「してはいけない行動」を教えようとする。心理学ではこれを「強化（または負の強化）」と呼んでいる。

子どもの成長は、「ほめる・しかる」を手段とした「しつけ」による部分と、それに加えて、子どもがモデルを見て自分から真似するというメカニズムに支えられて、成し遂げられる。「ほめる・しかる」は、再び心理学の用語を借りれば「賞と罰」である。親と関係にある人からほめられることは、賞のうちでも極めて重要なものの1つである。むろん他に、お金（収入）やモノを与えられたり、地位や名誉を与えられたりするほめられ方もある。さらに自分で自分をほめる、こともある。窓ガラスを磨いて、「サッパリした、気持ちがいい。今日磨いてしまってよかった」などと満足した状態はその例である。

しかられる場合も同様で、オモチャをこわすのはしかられる行為だが、大切にしているオモチャを不注意からこわしてしまった場合

に生ずる落胆は、自分で自分をしかっているのと同じだろう。

さらに「ほめられる」際のごほうびの価値の問題も考えておかなければならない。

めったにほめてくれない先生から「よくやった」と言われたときと、よくおせじを言う友人から「よくやりましたね」と言われたときとでは、その一言の「ごほうび（賞）」としての価値が違う。また同じ500円をもらっても、何か買いたいものがある子や、お小遣いを使ってしまった子にとっての500円と、ほしいものがない子の500円では有難みが違う。しかられるのも同様で、ゲンコツ1つをとってみても、ふだんよくもらっている子と初めてなぐられた子では重みが違う。人前で恥をかいても平気な子もいれば、小さな失敗でくよくよして、それが大きく罰の効果をもつ子もいる。

また「ほめる（しかる）」者と、「ほめられる（しかられる）」者との関係も加わってくる。これは心理学者たちが、ネズミを使って行動に与える「賞と罰」の効果——たとえば正しい行動にはエサを、誤った行動には電気ショックを与えるなど——の実験には加わっ

ていない人間的な要素である。自分が尊敬している人からの叱責と、自分が軽蔑している人からの叱責では、その効果はまるで違うだろう。ほめることも同様である。

こう考えてくると、「ほめる・しかる」とはなんと難しい行為だろう。考えてみると、子どもを育てたり教育する際には、もっぱらこの方法に頼っていながら、いつもこれでいいのか確信がもてないでいるのが、おとな一般の姿であろう。

さらにこうした「手段」に加えて、「何を」ほめるか、「何を」しかるかの対象が加わると、これはもうその人その人の人生哲学——人生観や人間観などの価値観——の問題である。深く考えたら、「ほめる・しかる」ことなどでできそうになくなる。

しかし同じほめ・しかるなら、少しでも有効なものとなしたい。人生哲学の内容や細部のノウハウはそれぞれにまかせるとして、多少のポイントをまとめてみよう。

### 動機と結果

#### ——どちらをしかるか——

子どもがしかられるようなことをしたとき、なぜそうしたか何らかの動機が考えられる。むろん不運としか言いようのない単なる失敗からひき起こされた事態もあるが。

しかり方のポイントの第1は、「動機と結果のどちらにウエイトを置いてしかるか」であろう。

具体的な例を挙げながら考えてみよう。表1は少し昔になるが、昭和53年に筆者が全国の小学校1年生の母親約4000人に行った調査データの一部である。

項目は「何かで失敗したとき」「他人との競争に負けたとき」「わがままや社会的ルールの無視」「親に金銭的な損失を与えたとき」の4領域で成っている。ところが表が示すように、子どもがとくにしかられる行為（上位5項目）は、②を除いていずれも「親に金銭的損失を与えたとき」で占められていることがわかる。しかし表の①③④⑤のいづ

れの場面でも、子どもは故意に親に損をさせようとしたわけではない。

①を例にとってみよう。子ども時代、大金を持ってお使いにいくときのあの緊張感を覚えているおとなたちも多いに違いない。子どもは精一杯気をつけて、その大役を果たそうとする。にもかかわらず、なぜかポケットに入れておいたはずの1000円札が見当たらない。ポケットというポケットを何度も裏までひっくり返し、落胆し、ではやはりどこかに落としたに違いないと、今来た道を目を皿のようにして戻る。ない。やっぱり見当たらない。そのときの絶望と母親にしかられることへの予感。おそろしい。その子どもの気持ちを察したら、なぐさめの言葉のほうがどんなに教育的であろう。しかし、そうする母親はわずか9.4%。「ひどくしかる」が3人に1人。ひどくこそしからないまでも、とにかく「しかる」が90.6%。これでよいのだろうか。

そうしたしかり方のまずさを一層よく示した結果が、⑤「手伝い」の場面である。頼まれなかったのに進んで手伝おうとした子どもの善なる「動機」と、2000円もする貴重なお皿を割ってしまった「結果」について、母親の71.1%は、（動機はともかく）結果に対して「しかる」と答えている。そのうち「ひどくしかる」者も17.8%に達する。

①のお使いと同じく、子どもはここでもわざとしたわけではない。手伝って、母親を喜ばそう、母親からほめてもらおうという動機から出た行為だったのに、大切なお皿が割れてしまった。子どもの失意、落胆、しかれることへの恐怖、いずれも察してあまりある。にもかかわらず、「なぐさめる」者はここでもわずか3割にすぎない。

ほめ方・しかり方のポイントの1つは、子どもの発達段階（年齢）に応じて、その行為の「動機」を重視することから「結果」に責任をとらせる、という移行ができるかどうかだろう。この調査対象の母親の子どもはまだ小学1年生である。もう少しその気持ちへのフォローがあってもよさそうだ。それなのに

表1 母親のしかり方

「次の場合、お母さんはどのくらいしかりますか。または逆になぐさめてやりますか」

- ① お使いの途中で1000円札を落としてしまったとき  
(カッコ内は「ひどくしかる」者の割合)  
しかる=90.6% (33.3%)    なぐさめる=9.4%
- ② 夕食に「好きなおかずがない」と子どもが文句を言ったとき  
しかる=87.0% (36.0%)    なぐさめる=13.0%
- ③ 張りかえたばかりの障子に、うっかり穴をあけてしまったとき  
しかる=80.6% (11.8%)    なぐさめる=19.4%
- ④ 上等なセーターにクギで大穴をあけてしまったとき  
しかる=79.1% (15.8%)    なぐさめる=20.9%
- ⑤ 頼まれないにお手伝いをしようとして2000円くらいのお皿を割ってしまったとき  
しかる=71.1% (17.8%)    なぐさめる=28.9%
- ⑥ 算数の計算を何度やっても間違うとき  
しかる=67.5% (16.3%)    なぐさめる=32.5%
- ⑦ 客の前で夫婦ゲンカの話をしてしまったとき  
しかる=55.8% (5.0%)    しからない=44.2%
- ⑧ おねしょをしたとき  
しかる=54.5% (11.0%)    なぐさめる=45.5%
- ⑨ 授業参観で間違った答えをしたとき  
しかる=48.0% (3.0%)    なぐさめる=52.0%
- ⑩ 同級生とのケンカに負けて泣きながら帰ってきたとき  
しかる=45.0% (8.5%)    なぐさめる=55.0%
- ⑪ 「もう1年生だから小さい子とは遊ばない」と言ったとき  
しかる=33.5% (3.5%)    しからない=66.5%
- ⑫ 父親の仕事の都合で遊びに行く予定がまたも中止、子どもが強く不満を訴えたとき  
しかる=23.4% (6.6%)    なぐさめる=76.6%

母親の多くは、自分が受けた経済的損失にばかりとらわれているかのようだ。

これが6年生ともなれば、いかに「その気はなかった」または「善意からだった」とはいえ、「失敗」して他人（この場合は母親）に迷惑をかけたことについては、その責任を感じさせなければならない。それが「しかる」というしつけの仕方になって現れる。成長につれ、子どもは社会的位置関係の中で自分をとらえ、自分の行為に責任を負おうとする態度が必要だ。しかし年少児であれば、とにかくその気持ち（動機）を汲みとって、なぐさめ励ましてやればよい。

年少のときから結果を問うしかり方は子どもを萎縮させるし、年長になっても「気持ち」ばかりに目をやるようでは、甘く過保護なしつけになってしまう。

### レディネス(準備状態)の下でしかる ——人間関係の下で——

中学校の教員をしている友人に、「つい体罰をしてしまうのは、新しいクラスを持って間もない頃ですか、それとも半年1年の後ですか」とたずねてみたことがある。友人から「まだクラスを持って間もない頃が多いですね。人間関係が教師と生徒の間にできてくれば、体罰はしなくて済むようになります」という答えが返って来た。ベテラン教師として信頼していた友人だったので、筆者の予想した返事は「人間関係ができて、これなら体罰をせずにはいられなかった教師の心がわかってもらえると確信がもてたときですね」だったのだが。

よく「しかるよりほめよ」と言われるが、なぜだろう。「しかる」ことが有効性をもつには、「しかる者」と「しかられる者」との間に親和関係や信頼関係の成立が欠かせない。愛し尊敬する対象からしかられる場合は、それが憎しみや嫌悪からのものでなく、自分のことを考えてくれたの行為として受け入れられる。その指示に素直にしたがう構えを作る。しかし、もし人間関係が成立していない状態

の下に行われるなら、それは力のある者の「威圧」にしぶしぶ屈服するだけのことであり、その場限りの効果が出ないのも当然かもしれない。「しかる」ことはしたがって、ほめることより何倍も難しく、時に非教育的になりやすい。

それに対して「ほめる」ことは、人間関係の成立を前提にしなくても、十分な効果が期待できる。ほめること自体が、しかる者としかられる者の間に人間関係を作り出す。子どもはその「好きな」相手からより一層評価してもらおうと、ほめられた行為を再び実行しようとするであろう。

このようにして「ほめる」ことで人間関係が成立すれば、その関係の下で有効に「しかる」こともできるようになる。気心の知れない相手や新しい集団の中では、しかることよりほめることを先行させることが必要だろう。

### 性善説に立つか性悪説か

#### ——あなたは？——

人間の性を善とみるか悪とみるか。すなわち子どもは放っておけば悪いことしかせず、なまけ者で向上心ややる気のない存在とみるか、それとも本来その性は善であって、学習意欲をもち、進歩や向上を欲する存在とみるかによって、ほめ方・しかり方の方法はたぶん大きく違ってくる。

もし性悪説の立場に立てば、何より厳しい罰や規則をもって、子どもを一定のワク内に止めておかなければならない。逆に性善説に立つなら、子どもが本来の備えている「よきもの」をうまく発揮できるように、ほめ・励まし、支えて見守ってやればよい。あなたはどちらの立場の人間観の持ち主だろうか。

日本人の子ども観は昔から性善説に立つものと言われる。民俗学の「七つ前は神のうち」とか、「罪もけがれもない子ども」との言葉は、これを説明するのによく引用される。

しかし日本人の子ども観は、人間の本性を「よきもの」とみなす一方で、「白紙」の状態であるから「善」である、とする考え方に

立つもののように思われる。いわば「植物」的子ども観であり、「意志を持たず、おとなの意のままにしたがういい子」がイメージされており、いわば西洋の「動物」的子ども観とは対照的に思われる。

西洋の子ども観の下では、人びとは小さい野獣をムチで打ちながら、その悪い（生来的）根性を修正していこうとする。とにかく子どもは「意志」をもち「欲求」をもったやっかいな存在とみなされる。こうしたやっかいな存在に対して、時には体罰を伴う厳しい罰（しかり方）が行われる一方で、西洋のおとなたちはその独自の意志や欲求をもった、しかも一人一人が違う動物である子どもたちに、限りなく個別に対応しようとする。

例えばアメリカの小学校での授業風景を見ていると、教師は絶えず一人一人の子どもに目を注ぎ、日本の教師だったら無視してしまうであろう子どものちょっとした表出に、こまめに反応する。その際にはクラス全体の動向は、教師の目からは外れてしまっている。したがって、授業の技術としてはおそらく不

十分なものかもしれないが、子どもたちにとって教師は、自分たち一人一人を見つめ、集団（クラス）より大切なものとして自分を扱ってくれる存在であり、いつもそれぞれの個にたいねいに対応してくれるという満足感があるに違いない。

授業風景を見ていると、1人の子どものつまらない質問に、教師は他の子どもをそのままにして、たいねいに答えてやっている。日本のクラスであれば、その質問が全体にとって意味のあるものでなければ教師はとり上げないか、短く事務的に切ってしまうだろう。とくに子どもが間違った答えをしたときに、日本の教師は全くフォローをせず「ほかに」と他の子どもに目を向けてしまう。

以上3つほどのポイントを挙げて「ほめ方・しかり方」のノウハウを考えてみたが、その1つ1つの場面に、親の生き方とその個性、またその家庭の文化が色濃く反映されているのではなかろうか。

〔調査レポート〕

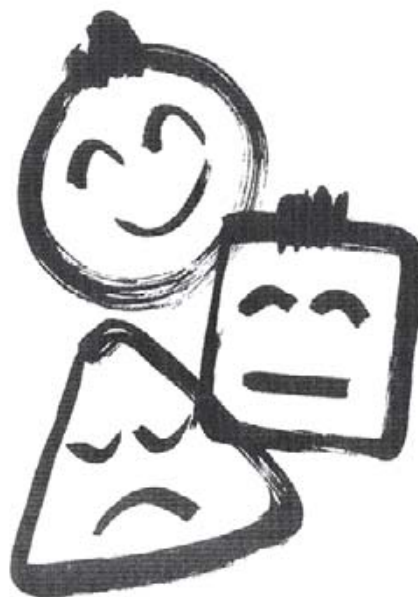
# ほめ方・しかり方

## 第1部 母親調査

東京学芸大学教授	深谷和子
文教大学女子短期大学部助教授	石川洋子
千葉県総合教育センター所員	中原美恵

## 第2部 子ども調査

杉並区立杉並第六小学校教諭	土橋 稔
横浜市立烏が丘小学校教諭	戸塚 智
目黒区立不動小学校教諭	矢部 崇



# 調査レポート ほめ方・しかり方 要約

## 1. 調査の目的と対象

本調査レポートは、現代の母親のしつけの実態と問題点を探るために、首都圏の母親924名とその子ども(4、5、6年生)939名を対象に行われた。



## 2. 学力への不満

子どもが思い通りに育っているかについての母親の評価は、もっともうまくいっているのが「健康」で、もっとも不満が多いのは「学力」である。(図1-7)



## 3. 自分は甘い母親ではない

しつけ手としての自己評価をさせると、全体としては子どもの言い分を通す「甘い母親」であることを否定する者は7割近くに達し(図1-8)、細かいしつけの方法をたずねてみても、「小さいときから厳しくしつけてきたし、細かいところまできちんとしつけている」と答える母親が7割にも達している。(図1-9)



#### 4. 「なるべくやめさせるようにしている」のがしつけの姿

35項目について、そのしつけの度合いをみると、「厳しく」と「なるべくやめさせるようにしている」を合わせるとほとんどの項目が70%から99%となっている（図1-10①、②、③）。しかし、しつけは「厳しく」しつけてこそ効果が期待できるのであって、「なるべくやめさせるようにしている」ではしつけていることにならないのではなかろうか。とすると、「しつけ」をしていない母親は逆に10%から90%にも達する。



#### 5. 母親の属性との関連

母親の属性との関連で分析すると、フルタイムの就労者や子どもの多い母親のしつけは比較的満足のいくもののように思われる。フルタイムの母親はよく子どもをほめ、かつ生活者としての自立を期待するしつけをしているようである。（図1-13）

#### 6. 父親と母親のしつけ

父親と母親のタイプは、すでに本サンプルの両親の時代から多様化しているように思われ、厳父慈母のようなパターン化はみられない。子ども調査の結果からも、おこるとこわいのは「とても・かなり」を含めると、父親65%、母親63%と差がない。「とてもこわい」のは父親に多いが、全体としては大差ではなく（図1-16）、かつ母親が「とてもこわい」家では、父親もとてもこわい者が多い。

（図1-17）



要 約

### 7. しつけに参加しない父親

さらに細部を見てみると、「すぐその場で注意する」「大声でしかる」「ねばり強く注意する」「納得するまで説明する」「体罰」など、どれも母親のほうがよくしており、父親は黙っていることが多い。(図1-18、19)



### 8. 父親のしつけへの不満

父親への不満の最大の項目は「一緒に遊んでやってほしい」であり、また母親の就労形態によっても不満の内容に差がある。パートタイム勤務の母親は、「遊んでやってほしい」「自分に子どもをまかせっ放し」であり、フルタイム勤務の母親は夫の「甘い父親ぶり」に不満を抱いている。(図1-20、表1-3)



#### ●調査概要

1. 調査主題 ほめ方・しかり方
2. 調査視点 ほめたり、しかったりすることにいつも確信がもてないおとなたちにとって少しでも有効なほめ方・しかり方とは何

かを日常生活の実態を通して探っていく。

3. 調査項目 子どもは思い通りに育っているか、どういう場面でのどの程度しかるか(しかられるか)・ほめるか(ほめられるか)、母親と父親のどちらがこわい存在だと思うか、など。

### 9. 「列のわりこみ」は「口答え」 ほどにはしかられない

子どもが一番しかられると考えているのは、親への口答えで8割、しかし列にわりこんで切符を買ったときは、6割でしかない。どこかウエイトの置き方がおかしいのではないか。(図2-1)



### 10. 誰がこわいか

男の子にとっては父親、女の子には母親、担任の先生が一番こわくない。(図2-3)

### 11. 母親は父親よりしかって、 ほめている

父親は母親よりしかりもせず、ほめてもない。子どもとの関わりが薄いのだろうか。(図2-4、5)

### 12. 子どもたちの声


具体的にどうしかられ、どうほめられたことが印象に残っているかを表2-4、5、6、7に掲げた。

4. 調査時期 1992年1月～2月  
5. 調査対象 東京、埼玉、神奈川、岐阜に住む小学校4、5、6年生939名とその母親924名  
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

### 7. サンプル数(子ども調査) (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	133	122	255
5年	182	192	374
6年	178	132	310
計	493	446	939

---



## はじめに

親たちが子どもをしからなくなったと言われる。保育所や幼稚園、学校などの現場からは、しつけ手としての役割が果たせなくなってきている最近の親たちの問題が、くり返し指摘されている。確かにわれわれが乗り物の中やレストラン、また街中で出会う親子連れの姿に、そうした思いを強くすることも少なくない。しかし、家庭の教育力の低下と一括して言われている現状は、果たしてそのまま肯定していいのだろうか。それともひょっとしたら、しつけの内容や目標、その方法が昔と変わってきているだけなのかもしれないのである。

このレポートは、以上のような問題意識に立って、現代のしつけの現状と問題点を母親と子どもの両方から探ろうとした。第1部は母親調査であり、第2部は主として自由記述による子ども調査の結果から構成されている。

# 第1部 母親調査



---

## ■第1部 母親調査から

---

母親対象のしつけ調査は、巻末にある調査票を用いて、1992年1月から2月に実施された。対象は東京、埼玉、神奈川、岐阜県に住

む小学校4、5、6年生の母親924名で、全て学校通しで子どもによる持ち帰り調査による。

### ●調査対象について

調査対象となった母親の子どもは、図1-1のように、6年生が33%、5年生39%、4年生27%となっており、図1-2に掲げたように、子どもの数は一人っ子8%、2人が52%、3人が35%となっている。

また母親の年齢は30代後半が46%、40代前半が38%（図1-3）で、父親の年齢はそれより若干高い（図1-4）。

また母親の職業は図1-5に示したように、専業主婦が39%、残る6割は何らかの形で仕事に就いている。6割のうちパートタイムで働く者が21%と多いが、自営業（夫とともに）18%、フルタイムで働く者13%を合わせると31%となり、「働く母親」の姿も次第に一般化しつつあることがわかる。図1-6には父親の職業を掲げたが、6割がサラリーマンである。

図1-1 学年

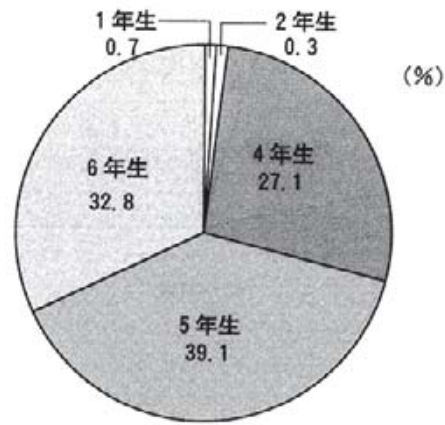


図1-2 子どもの数

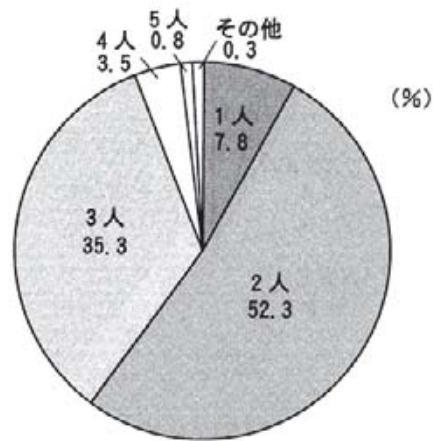


図1-3 母親の年齢

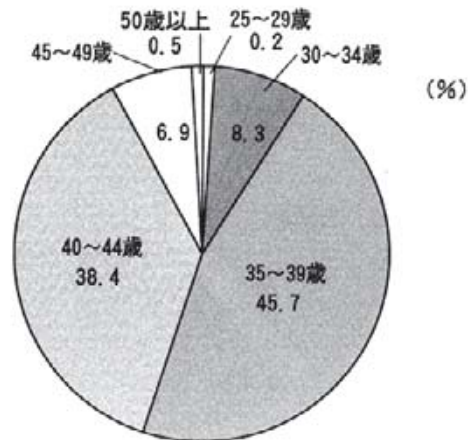


図1-4 父親の年齢

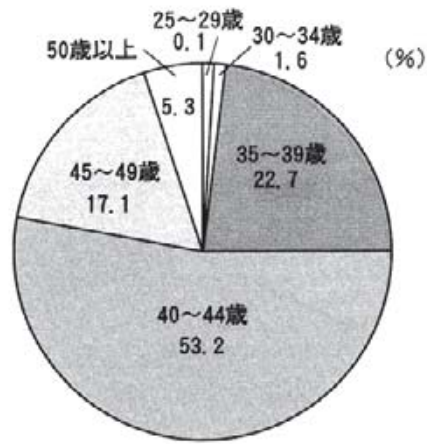


図1-5 母親の職業

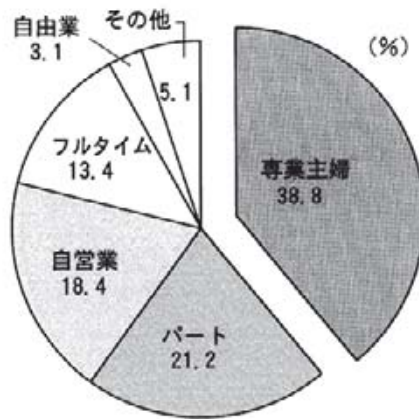
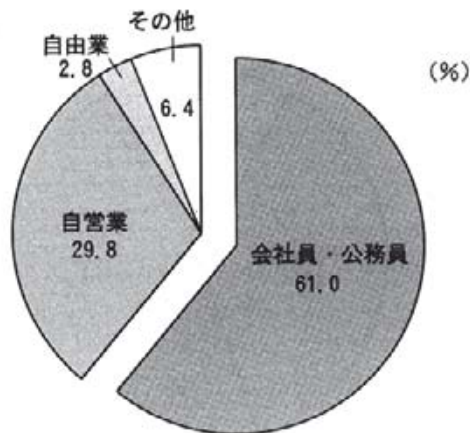
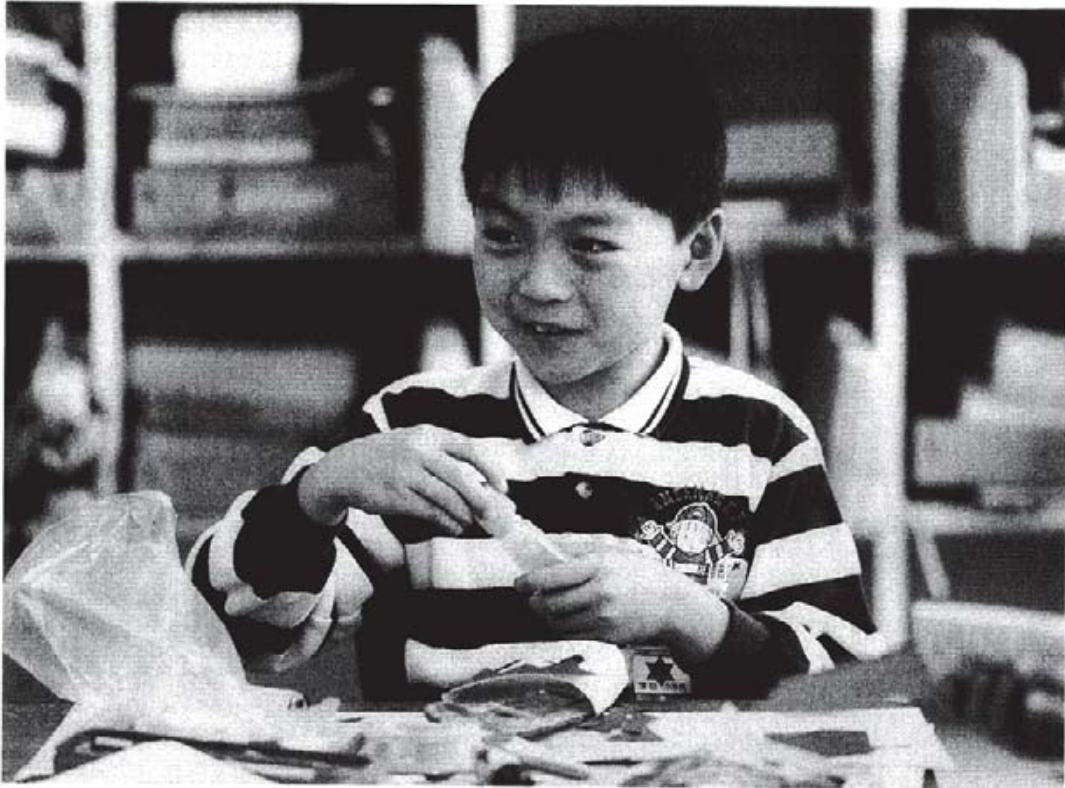


図1-6 父親の職業





# 1. 子どもは思い通りに育っているか



子どもは親の人生の希望である。誰もが自分の理想のままにすこやかに育ててほしいと願う。しかし他方で、親の人生は「あきらめの歴史」である、という言葉もある。では小学生の母親たちにとって、わが子の成長はどのくらい理想を実現したものなのか。

図1-7によれば、「健康、性格、しつけ、学力」のうち、一番「思い通り」に近いのは健康状態であることがわかる。「思った以上にうまく育っている」とする親の至福な状態は、男の子の40%女の子の46%の母親の中にある。「まあまあ」を加えると実に95%を超えている。

しかし、他の「性格、しつけ、学力」については不満も多い。ちなみに「まあまあ」を抜いて「思った以上にうまく育っている」割合と「うまく育っていない」割合を比べると、以下ようになる。

	思った以上である		うまく育っていない
健康	43%	≥	5%
性格	14%	>	9%
しつけ	7%	<	19%
学力	11%	<	25%

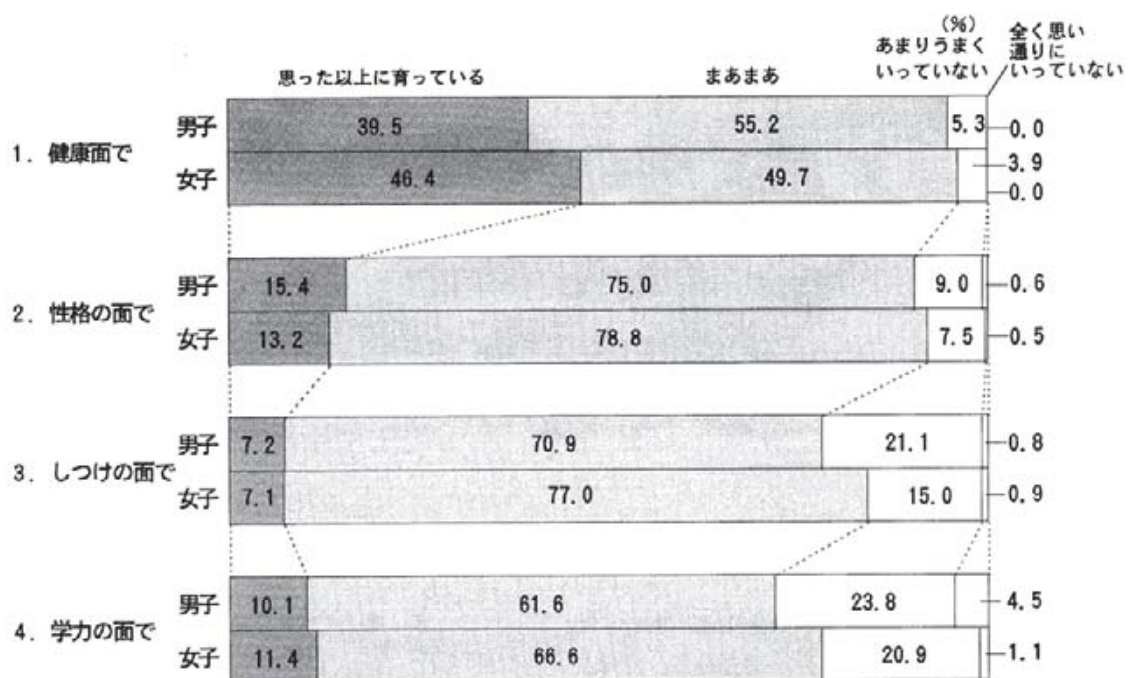
つまり全体としては「まあまあ」受け入れられる状態としても、子どもに不満や失望感を抱く母親に注目すると、「しつけ」と「学力」の面でもっとも不満が多く、しつけに関しては19%、学力に至っては25%が、「まあまあ」と受け入れることのできない不満足な状態にある。学力の持つ意味が子どもの受け入れ（評価）に大きな比重を占めるようになった今の時代の「親の不幸」が実感させられる数値である。明治や大正の昔のように、子どもの「学力」は比較的どうでもよく、それよりも「家族の暮らしに役立つ子」がいい

子として評価される時代であれば、子どもの成長のプロセスで、親の満足感も幸福感もより強く、子どももより十分にセルフ・エスティームを抱くことができただろうに。

それにしても世で言われるほどには、「しつけ」が「うまくいっていない」とは思っ

ていない母親たちの意識はやや意外である。「まあまあ」が、男子、女子とも7割を超え、「うまくいっていない」は男子で22%、女子で16%でしかない。これでは「家庭の教育力の低下」の指摘も、母親たちにとってはたぶん他人事なのではなかろうか。

図1-7 子どもは思った通りに育っているか



## 2. しつけ手としての自分（母親）



自分の「しつけ」をどう評価しているかについて図1-8、図1-9を見ると、再び世間で言われているのとは違った数値が見いだされる。

まず図1-8によれば、「子どもの言い分を通す甘い母親」と自分をみなしているのは「まあそう」を含めても32%でしかなく、7割近くの母親はこれを否定している。

さらに図1-9でしつけの細かい方法を見ても、「小さいときから体罰も含め、かな

り厳しくしつけてきた」とする母親は「とても・わりとそう」を加えると40%、「まあそう」を含めると75%にも達する。「甘い母親」を任じる者は4分の1でしかない。同様に「細かいところまできちんと注意している」も7割にも達している。「しかるのが苦手」で「しかるよりほめる」タイプとしているのは4割にすぎない。大方の母親は人びとの指摘（しつけをしていない）をよそに、きちんとしつけ手の役割を果たしているつもりなのである。

図1-8 自分のしつけ  
「あなたは子どもの言い分を通す甘い母親か」

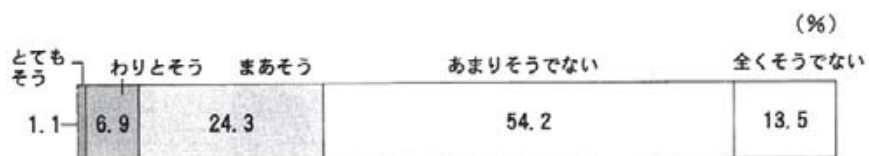
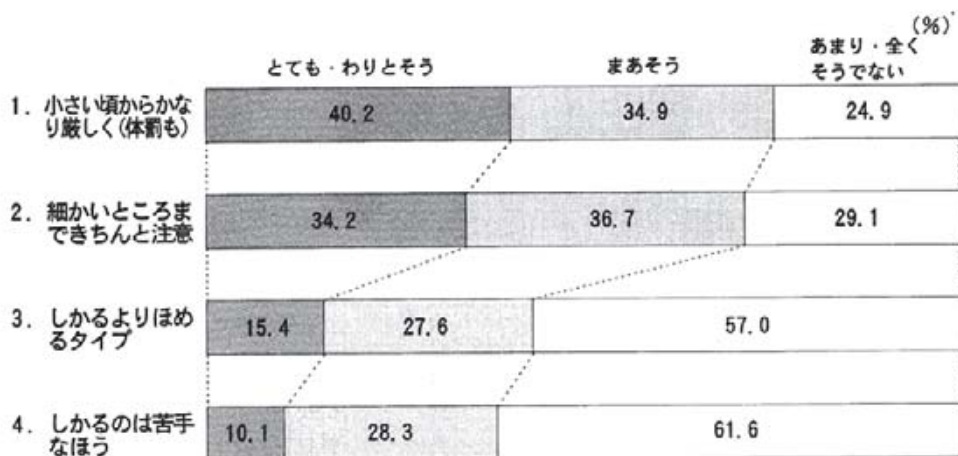


図1-9 しつけの方法



### 3. どうしかっているか



図1-10①、②、③は具体的なしつけ場面を挙げ、それぞれについて「厳しく注意しておささせる（しかる）」「なるべくやめさせる」「一応注意はするが大目にする」「特に何も言わない」のうち、自分の日常についてもっとも近いしつけの方法に○をつけさせた結果である。

図は上から「厳しくしかる」が50%以上の項目（12項目）、「49%から30%」までの項目（12項目）、30%以下の項目（11項目）に分けて作図してある。

まず全体としては、「厳しくしかる」「なるべくやめさせる」がほとんどで、大目に見たり注意せずそのまま、などはしていないと、母親たちは答えている。特に「大目にする・何も言わない」が多いのは28「テレビを見ながら食べる（38%）」、31「買い食い（38%）」、33「食事中のおしゃべり（46%）」、34「エンピツなどをなくす（35%）」、35「テストの点数が悪かったとき（68%）」でしかない。こ

れらの5項目についてでも、最後の「テストの点数が悪かったとき」を除いては「厳しくしかる」または「なるべくやめさせる」親のほうが、放任する親よりはるかに多いのである。

さらに細かく見ていくと、「厳しくしかる」が50%以上の項目のうち、上位4項目は公共的な場面のしつけ、1「信号の無視」、2「花や木を折る」、3「電車の中で走り回る」、4「デパートでさわぐ」が並んでいる。本当にそうだろうか。とすれば日本の母親のしつけは、かなりきちんに行われていることになる。

この傾向は、次の図1-11「どんなときにほめるか」でも同様である。「たいていよくほめている」の割合を見ていくと、もっともほめるのが1「公共の場でよいことができたとき」であり、またテストでいい点数がとれたときよりも、2「運動会などでいい成績がとれたとき」にほめ、また4「手伝いをした

とき」、5「あいさつができたとき」ほめると母親は答えている。図1-10に次いで図1-11からも母親たちのしつけについての模範生ぶりは否定できないかに思えてくる。しかしそうした結論は、どこかわれわれの日常の印象と離れたもののようにも感じられる。どこかに分析や解釈の甘さがあるのかもしれない。

この点について、多少手がかりになりそうなデータが、逆の順序にはなるが、第2部で扱う子ども調査のデータの中にある(図1-12)。

これは子ども対象の調査の中で、子どもが「とてもこわいお母さん」(25%)と「あまり・ぜんぜんこわくないお母さん」(12%)としたグループを抜き出して8つの場面でのくらいひどくしかるかを見たとのである。図が示すように、「とてもこわい母親」の子どもは、こわくない母親の子どもより、全ての場面で「とても・わりとひどくしかるだろう」と答えている。

つまり「しつけ」とはそれぞれの場面で「その場で厳しく注意してなおさせる」くらいに厳しいものでなければ、実効が期待できないのではなからうか。何も言わなかったり、口先だけ注意して「大目にみる」のは論外としても、「注意してなるべくやめさせる」のでは、しつけとは言えないのかもしれない。むろん子どもが悪いことや望ましくないことをしたときに、例外なくきちんとしかることは難しいし、また「こわい親」と言われたくない思いが誰の中にもある。しかし、その感情を制して例外なくきちんとしかる、しかも自分の感情に流されず(昨日と今日でしかっ

たりしからずにおく、などをしないで)、場面やいくつもの口実にかかわりなく、「きちんと」しかってこそ、初めて「しつけ」をしていることになるのではないか。

とすると図1-10は、「厳しく」の数値だけがしつけの範囲に入り、それ以外は程度の差こそあれ「十分にはしつけていない」とみなすべきなのだろう。図1-10①の上位の公共的場面のしつけを例に見ていくと、信号無視は子どもの命にかかわる行為なので87%が厳しくしかって当然としても「花や木を折る」ことでは、しつけが十分でない母親は21%、「電車の中で走り回る」ことについては同じく21%、「デパートでさわぐ」ことについても30%がしつけていないグループに入る。しかもどんなに厳しくしつけているつもりでも、日によって場面によって多少は原則がゆるめられるのが一般的なしつけの姿だとすれば、この35項目についての数字は、全体として厳しさの不足したものと解釈したほうがよさそうである。

また「厳しくしかる」が50%を下回る、項目18から24(図1-10②)は一層しつけの甘い項目であり、さらに図1-10③の30%を下回る、項目25から35に至っては、ほとんどしつけられていない項目とみなしてもよさそうである。(ただし「テストで悪い点数をとったとき」や「嫌いなものを残す」のように、厳しくしかることが妥当かどうか疑問の余地のある項目については、こうした判断から除いて考えたほうがよいかもしれない)

なお、これらについて性別、学年による差は思ったよりわずかであった。

図1-10 ① 具体的な場面でのしかり方

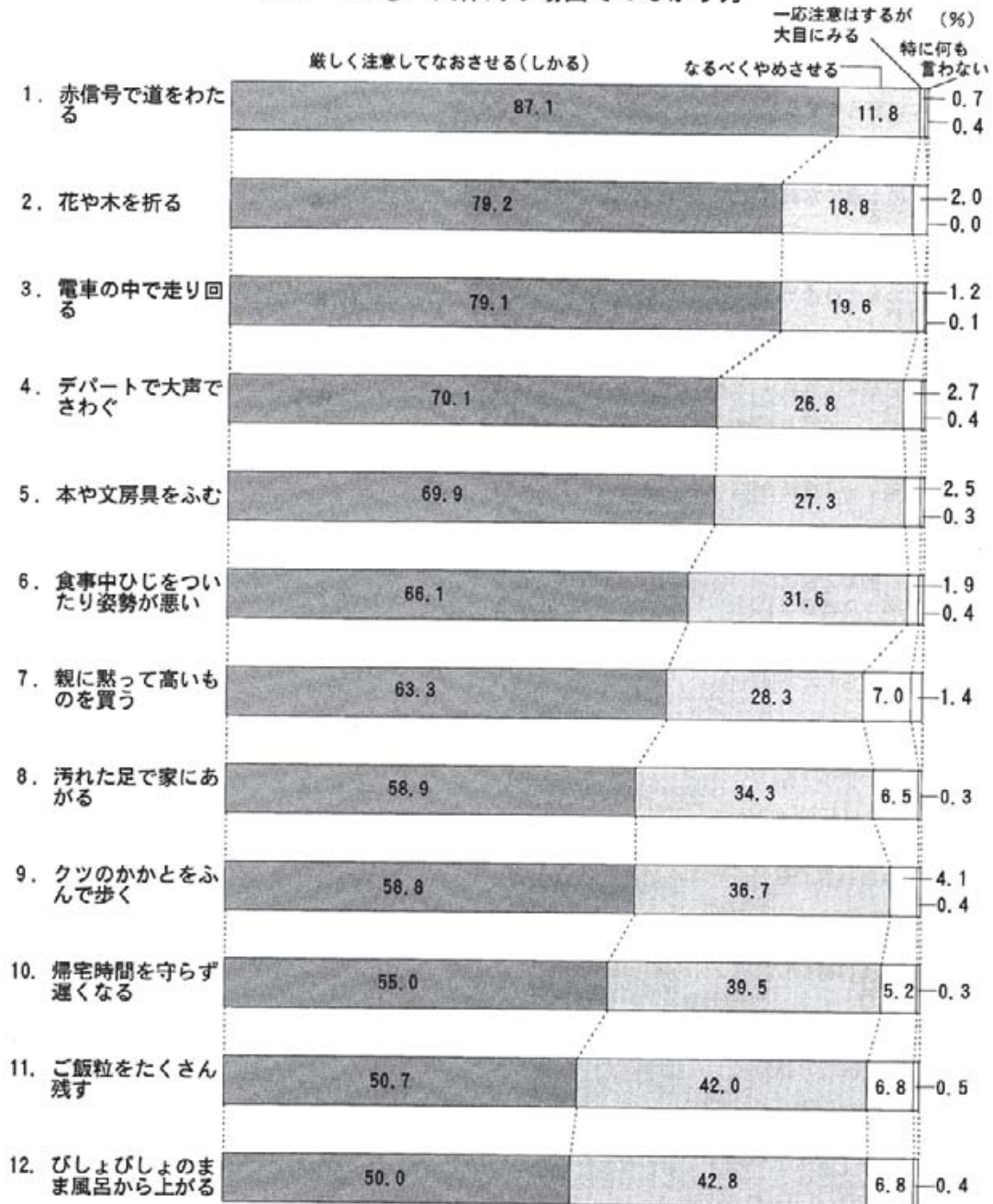


図1-10 ② 具体的な場面でのしかり方





図1-10 ③ 具体的な場面でのしかり方

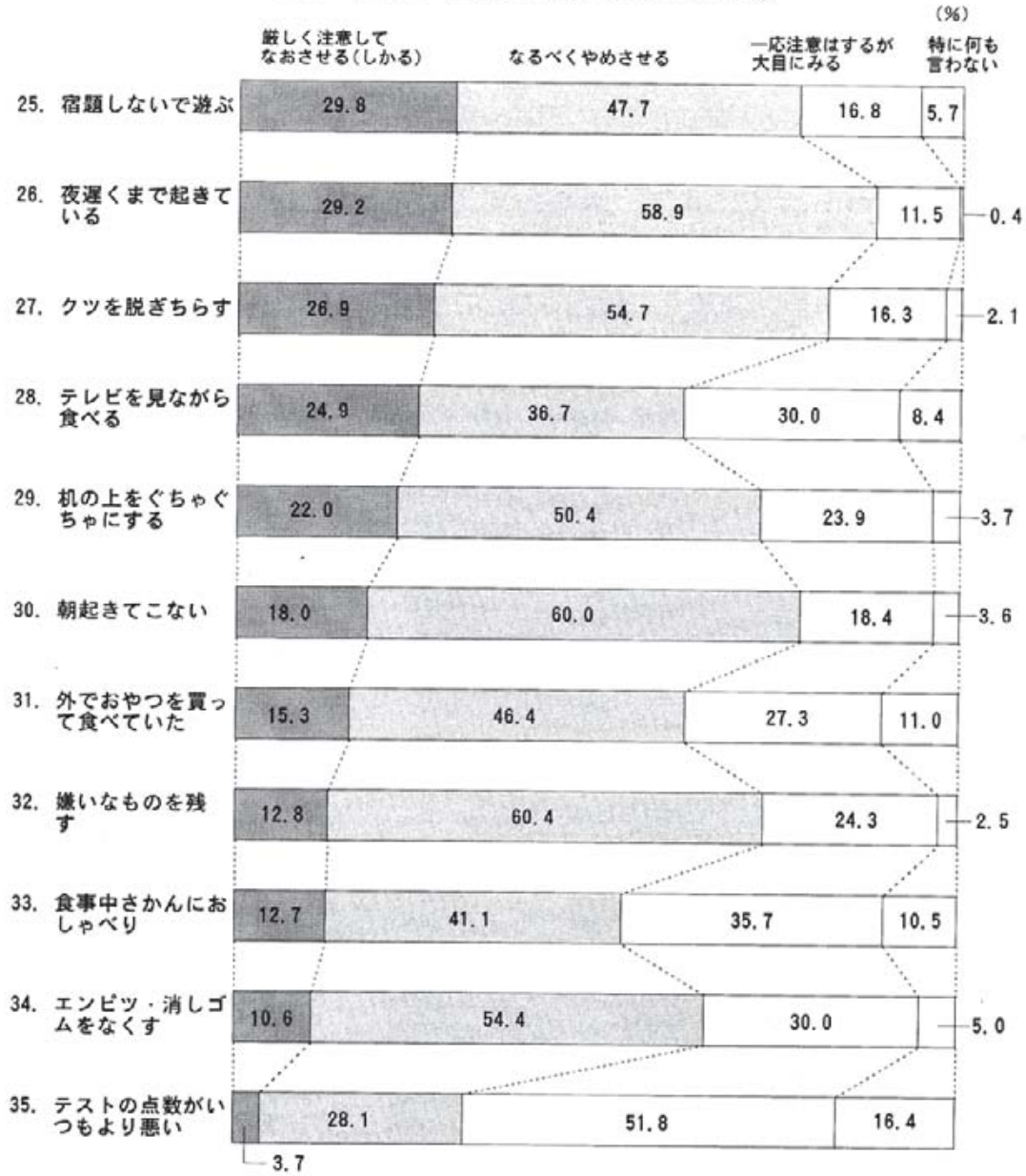


図1-11 どんなときにほめるか

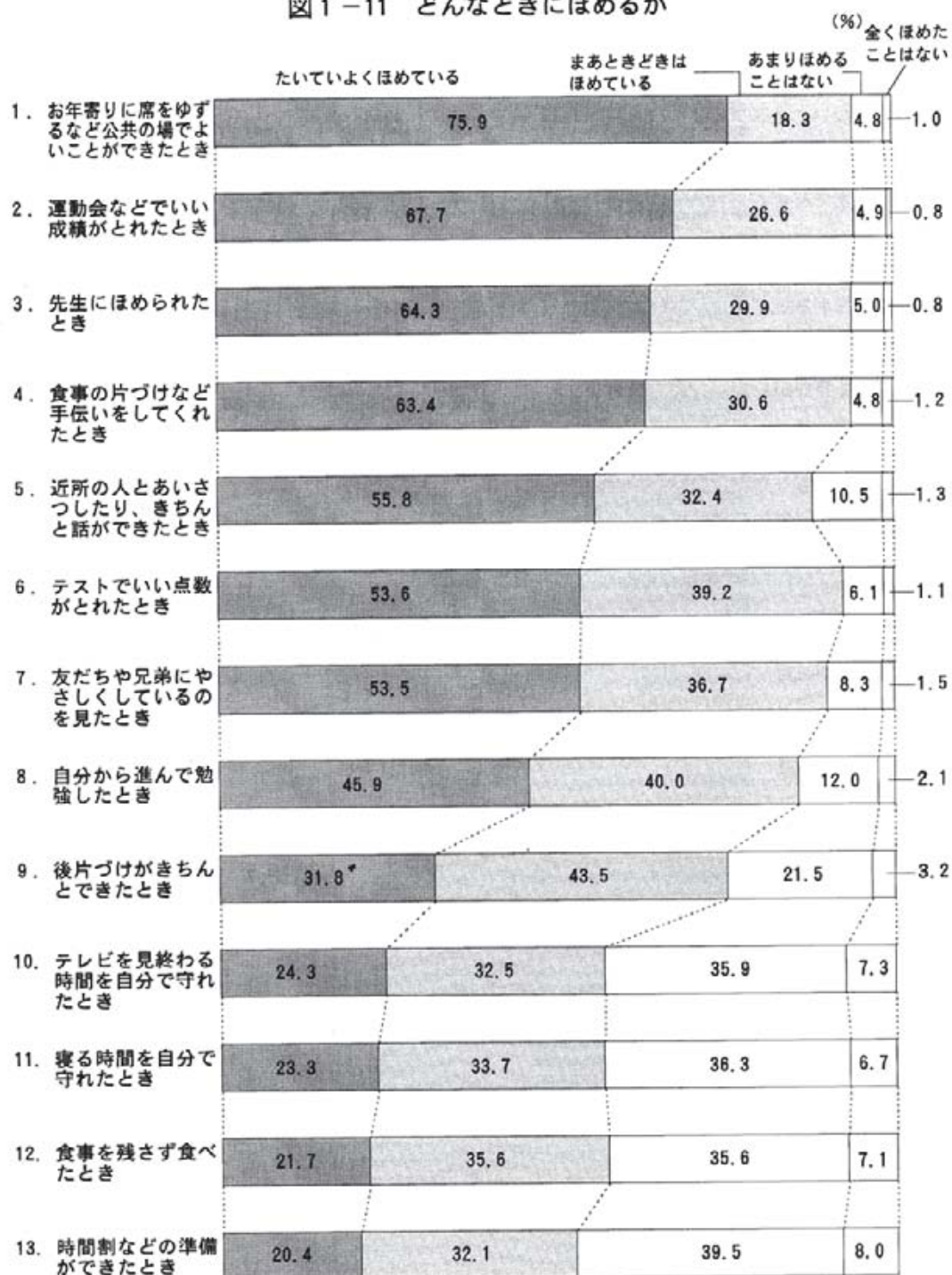
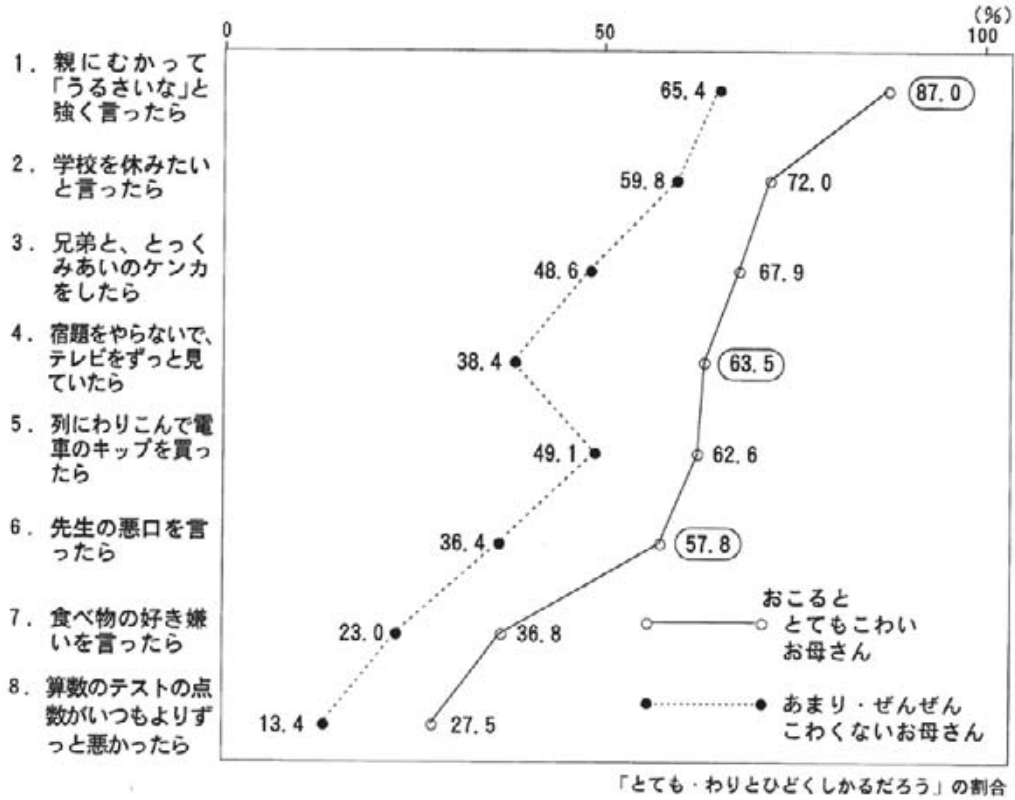


図1-12 親がしかる場面の予測 × お母さんのこわさ (子ども調査)



## 4. どんな場合にしかるか



どんなときにどのようにしかるか。それは単なるしつけのテクニックの問題というよりも、その人の人生観なり人間観——人はこうあらねばならない——の反映とされる。そうした「しつけ」のいわばポリシーの成立過程は複雑で、分析も難しいと思われる。しかしそのポリシーの形成とは別に、母親の置かれている状況——例えば忙しさ、によってそのパターンは変更を余儀なくさせられるのではなからうか。

ここで、いくつかの条件をひろってみる。母親の年齢、子どもの数、祖父母との同居、母親の職業、母親の両親のしつけ（厳しい親であったか）についてデータ処理を試みた。しかし母親の年齢については年齢幅が狭いため有意な傾向はみられず、祖父母との同居も他の条件によってその影響が消されてしまう程度のものでしかないようである。残った条件のうち多少影響が見られたのは、母親の就労形態（職業の有無）と子どもの数であっ

た。

まず図1-13は、母親の就労形態の中からフルタイムで働く者を選び、専業主婦のしつけ（どんな場合にほめるか）のパターンと比較したものである。

図が示すように、全体として「よくほめている」のは、専業主婦よりフルタイムで働く母親である。接触時間が少ないために、意識的に子どもとのコミュニケーションをはかっているのであろう。しかも項目の細部を見ると、専業主婦がよくほめるのは8「近所の人にあいさつや話がよくできたとき」、1「お年寄りに席をゆずるなど公共の場でよいことができたとき」で、いわば他人の目を意識したしつけが特色である。

これに対して働く母親は9「後片づけがきちんとできたとき」、10「学校へ行く準備ができたとき」、2「食事の片づけなど手伝いをしてくれたとき」、7「自分から進んで勉強したとき」、11「テレビを見終わる時間

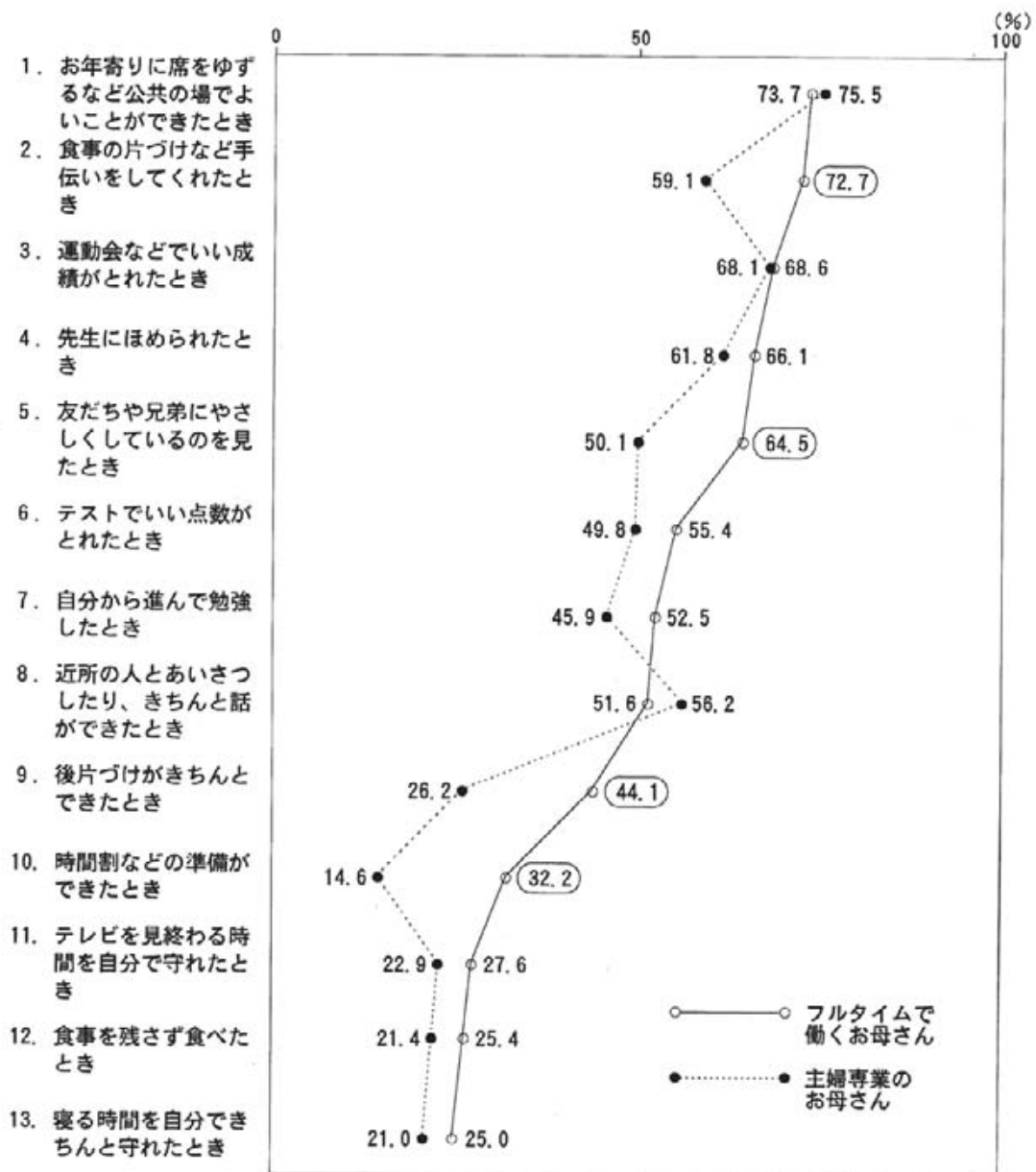
を自分で守れたとき」、13「寝る時間を自分で守れたとき」のように、ある意味では生活者としての自立につながる場面で、ある意味では忙しい自分を助けてくれたとき（母親の手をわずらわせる度合いの少ない場合を含む）に、よくほめている。子どものそばにいて世話をしてやることのできる専業主婦のほうは、とかく外づらを気にしたしつけをし、

時間はあっても基本的なしつけがおろそかになっているのではなかろうか。

母親の忙しさとしつけとの関係を見るデータをもう一つ、後にふれる子ども調査の中から拾い出してみた。表1-1は一人っ子と4人以上の兄弟（自分も含めて）のいる子が受けているしつけの厳しさの差である。

子どもの数の多い（忙しい）母親は、表が

図1-13 お母さんがほめるとき × 母親の就労タイプ



「たいていよくほめている」割合

示すように、基本的な生活習慣の形成に関する部分で厳しくしかっている。一人っ子で時間を多くもつ母親は公共的な場面や「遠くに出かけた」「帰宅時間が守れない」などの家の外での行動に神経を使い、「友だちとのなぐり合いのケンカ」も含め、いわば過保護なしつけが特徴的である。

母親のしつけのパターンに作用する条件はむろん職業や子どもの数などの本調査で見い

だされた「忙しさ」の要因だけとは考えられない。しかし、これ以上の要因を抽出するには、年齢、学歴、職業、子どもの数などの属性をそれぞれ同じにするなど、本調査の何倍ものサンプル数が必要であろう。こうした要因の検討は、より大規模な調査が行われる機会に待ちたいものであり、残された課題と言えるだろう。

表1-1 しつけの方向 × 子どもの数

〈一人っ子のお母さんのほうが厳しく注意する場面〉	
1. デパートなどで大声でさわいだとき	(+23.9)*
2. 電車の中で走り回ったりしたとき	(+17.9)
3. 宿題を終わらせないで遊んでいたら	(+15.7)
4. 自転車で、かなり遠くに出かけたのがわかったとき	(+15.3)
5. テレビゲームを長い時間やっていたら	(+14.7)
6. 友だちとなぐり合いのケンカをしたとき	(+11.9)
7. 帰宅時間を守らないで、遅くなったとき	(+8.4)
8. 自分で時間割をそろえることができなかったら	(+8.4)

〈兄弟の多い子のお母さんのほうが厳しく注意する場面〉	
1. テレビを見ながら食べていたら	(-34.2)*
2. お茶わんにご飯粒をたくさん残していたら	(-24.5)
3. 親に口答えを言ったら	(-17.0)
4. 食事中、ひじをついたりして姿勢が悪かったら	(-16.7)
5. 食事中、さかんにおしゃべりしていたら	(-14.5)
6. クツを脱ぎちらしておいたとき	(-11.4)
7. 洋服をだらしなく着ていたら	(-10.9)
8. エンピツや消しゴムをなくしたとき	(-9.7)

\* ( ) の数値は、両群の母親の「その場で厳しく注意してなおさせる」%を比較したもの

→「一人っ子のお母さん」-「兄弟の多い子のお母さん」

## 5. 両親としつけ



子どものしつけ手は、母親だけではなく父親も重要な存在である。しかし、とかく外で過ごす時間が多かったり、伝統的なジェンダー役割（性別による役割）の支配を受けて、実際には父親より母親のほうがより子どものしつけを担当しているのが現状であろう。では、その中にどんな問題があるのだろうか。

まず図1-14は母親の子ども時代の自分の家庭の中での両親像である。30代後半から40代前半の母親の両親は、大正時代か昭和の初期に生まれた人びとであろう。図が示すようにこの年代の父親は、かつての厳父イメージとは少し違った存在になってきていることがわかる。父親像と母親像はそれほど大きな違いはなく、むしろ「厳しい父親」は「かなり・わりと」を含めれば43%に達するが、他方「甘い父親」も27%もいるのである。ただし、表1-2にみられるように印象的なしかり方は父親に多い。

では、現在の両親像はどうか。

図1-15に示したように「子どもにとって父親と母親のどちらがこわい存在か」をたずねたところ、全体として57%が父親を、26%が母親を「こわい存在」と評価している。図1-14と聞き方が多少違うので、直接的な比較はできないが、ここでも母親のほうがこわい（父親はこわくない）家庭が少なくない割合で見いだされる。図1-14、図1-15の結果を合わせて考えてみると、すでにかなり前から父親と母親の姿は多様化してきており、かつてのように厳父・慈母のようなパターンに自分をはめこむ作業から親たちは解放されてきていることがわかる。これは親たちの自然な姿なのかもしれない。

ここで角度を変えて、子どもたちに父母のこわさの評価をさせてみよう。

図1-16に示したように、「おこるとこわい人」については、「とてもこわい」は、さすがに父親が37%、母親が25%と差があるが、「かなりこわい」を含めると、父親65%、母

親63%と差はほとんど存在しない。そして図1-17に示したように、両親評価の関連を見てみると、母親が「とてもこわい」家では父親もとてもこわがられており、逆に母親が「こわくない」家では、こわくない父親の割合が多くなっていて、相関が見られる。

つまり「親の権威」が確立した家とそうでない家の存在、と言えるかもしれない。

次に、もう少し具体的なしつけの場での両親の姿を見てみることにしよう。図1-18はしつけの方法を6つ挙げて「父親がするか、母親がするか」を母親にたずねた結果である。図が示すように、どのしつけ方も「母親のほうがよくする」と答えられている。

例えば「すぐその場で注意する」母親は72%（父親は7%）、「大声でしかる（どなる）」のも母親59%（父親は20%）、「体罰」も、母親が42%（父親は32%）と、どれをとってみても「父親のほうがする」割合が上回る項目はみられない。

では、父親はどうしているのだろうか。図1-19が示すように、父親は母親よりずっと「黙っている」のである。

ここに見いだされるのは、しつけの場で親としての役割を放棄しているかのような父親の姿である。そこに母親のいらだちも生ずるのであろう。図1-20は夫に対する不満をたずねた結果であるが、まず「子どもとお休み

図1-14 母親の両親の厳しさ

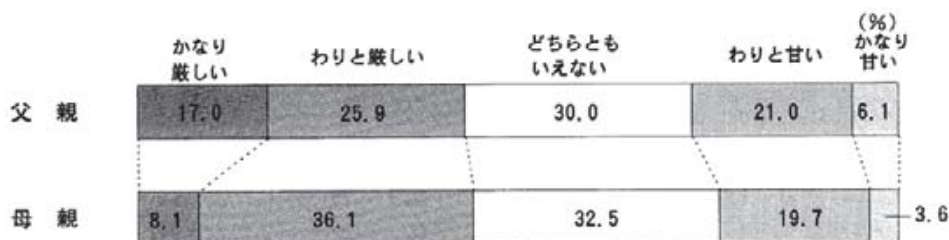


表1-2 一番強く印象に残っているしかり方をしたのは

	(%)
父親から	62.2
母親から	37.8



の日は一緒に遊んでやってほしい」とする接触時間の少なさが指摘され、次いで半数近くの母親が「自分に子育てはまかせっ放し」必要なとき、子どもにびしっと言ってくれない」「子どもの要求を受け入れてしまう」などの不満をもっており、弱い父親の存在が浮かび上がっている。

ただし、ここでも父親に対する不満は母親の生活スタイルに関わりをもっていて、表1-3に示したように、母親の仕事の有無との関わりでは、「お休みの日は一緒に遊んでやってほしい」の要求はパート就労の母親にもっとも強く、かつ「子育てはまかせっ放し」という不満も強い。父親の側がパート就

労を家事の片手間ぐらいにしか認識せず、妻への育児協力がされないためであろう。

これに対してフルタイム勤務者は、「必要なとき、子どもにびしっと言ってくれない」「子どもの要求を入れてしまう」「母親がしかるときに弁護士に回る」などの「甘い父親」に批判的で不満を持っている。おそらくフルタイムで働く母親はそうでない母親よりも家庭内で父性的もしくは男性的に行動し、しつけにもそうした影響が生じるため、父親が逆に母性的に補佐役をつとめようとするのではなかろうか。

これに対して、専業主婦や自営業の母親は、やや不満の少ない傾向がみられる。

図1-15 子どもにとっては両親のどちらがこわい存在だと思うか

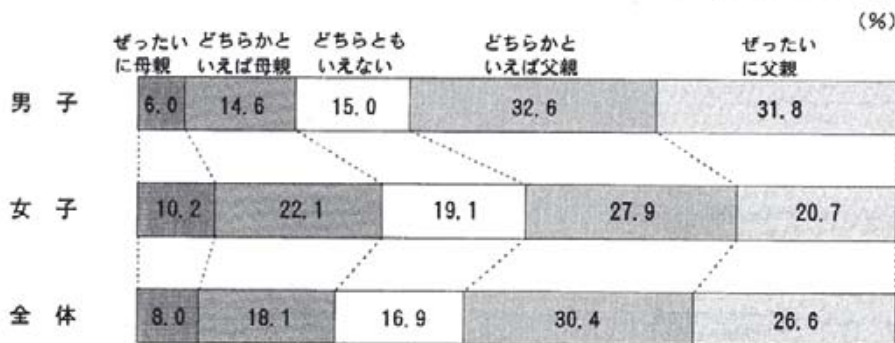


図1-16 おこるとこわい人（子ども調査）

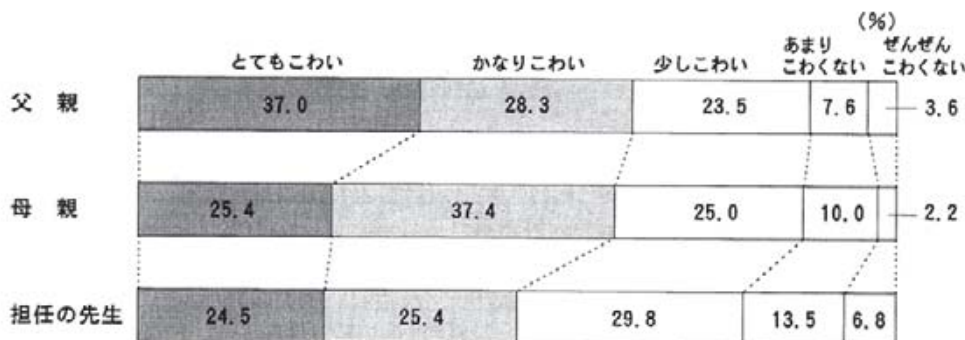


図1-17 お母さんのこわさ × お父さんのこわさ (子ども調査)

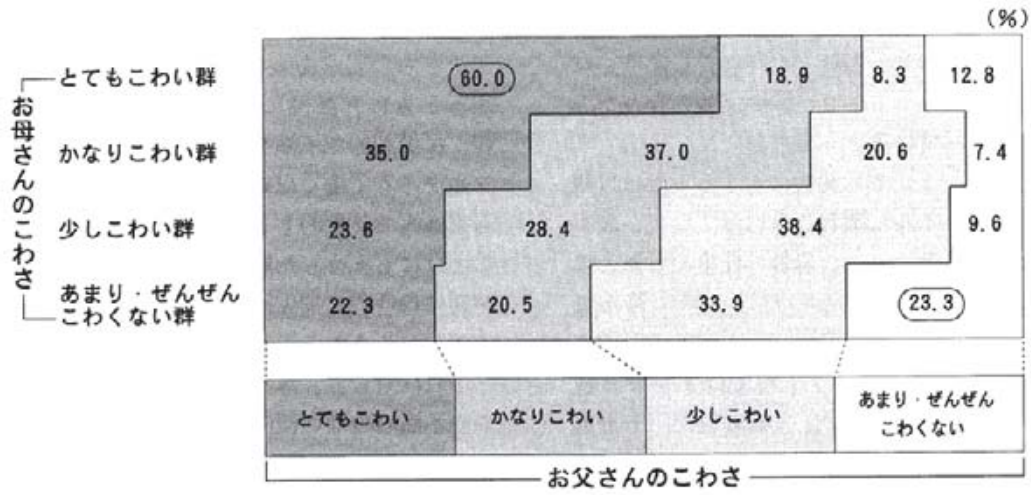


図1-18 両親のしつけ方の違い

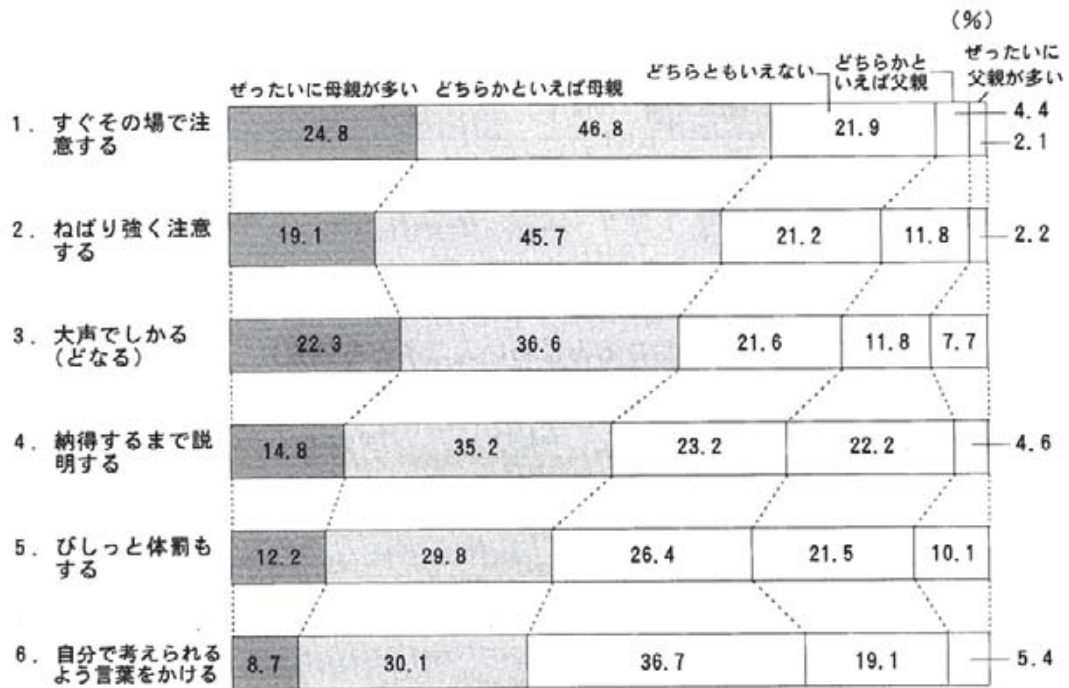


図1-19 黙っているのは

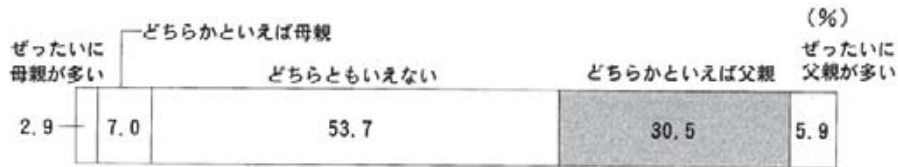


図1-20 父親の対応について

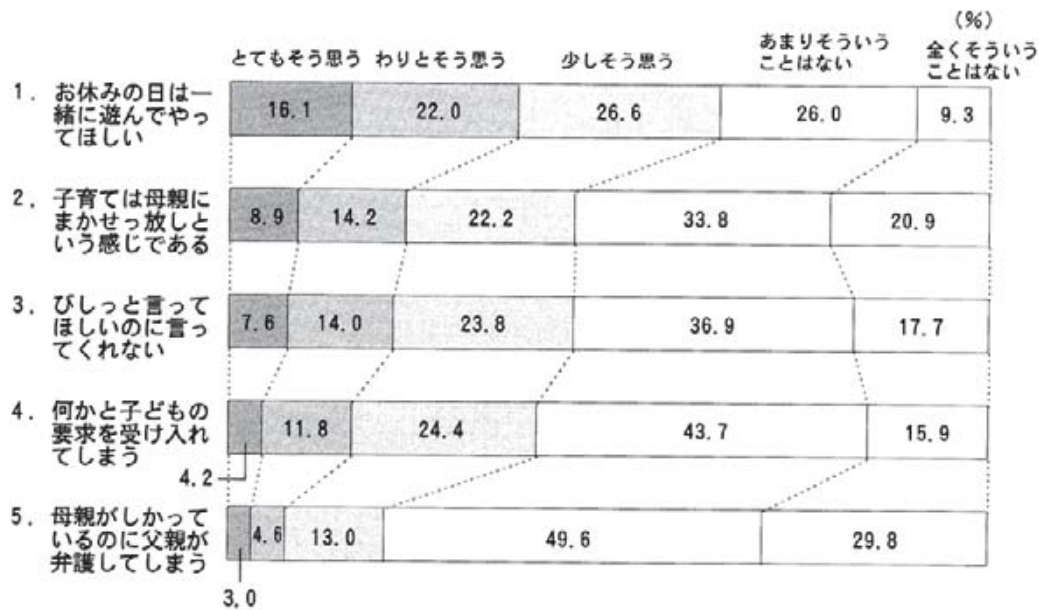


表1-3 父親への不満 × 母親の就労タイプ (母親調査)

父親への不満	母親の就労タイプ (%)			
	主婦専業のお母さん	パートで働くお母さん	自営業のお母さん	フルタイムで働くお母さん
1. お休みの日は一緒に遊んでやってほしい	36.8	38.6	32.3	37.4
2. びしっと言ってほしいのに言ってくれない	18.3	22.6	19.4	29.3
3. 何かと子どもの要求を受け入れてしまう	14.9	18.5	14.5	19.0
4. 母親がしかっているのに父親が弁護してしまう	6.3	9.6	7.3	10.4
5. 子育ては母親にまかせっ放しという感じである	22.3	28.1	19.5	23.3

「とても・わりとそう思う」割合  
 ○印は最大値、— は最小値を示す



## 第2部 子ども調査



## 1. 調査の概要

1部では、ほめ方、しかり方について、母親の意見を紹介、分析してきたが、「ほめられる」「しかられる」その当事者としての子どもたちは、そのことをどのように受け止めているのであろうか。第2部の子ども調査では、子どもたちの自由記述の分析を中心に、「ほめられる」「しかられる」側としての子どもたちの声を紹介したいと思う。

調査対象の子どもたちは、1部でアンケートに答えてくれた母親の子どもたち、4年生255名、5年生374名、6年生310名である。

表2-1が示すように、その多くは両親と子ども2人の4人家族である。祖父母と同居の家族も約4分の1いるが、子どもは2人、多くても3人である。つまり、3世代世帯ではひとつの家の中に、子ども2人に対して親が4人もいる場合もある。ほめ方、しかり方に関して、この少子化の傾向は、親の目が届きやすい、子どもとの関わりをもちやすいという意味で、良くも悪しくも左右するのであろう。

表2-1 家族構成

### ① 家族の人数

人数	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人以上
%	0.4	6.8	40.4	23.6	13.5	12.6	2.7

### ② 子どもの数

人数	1人	2人	3人	4人	5人以上
%	6.3	52.5	34.9	3.5	0.8

### ③ 祖父母との同居

同居の有無	両方と同居	祖母と同居	祖父と同居	同居していない
%	23.6	11.9	2.2	62.3

## 2. しかられ方・ほめられ方

子どもたちの生の声を紹介する前に、おおまかに、子どもたちの「しかられ方」「ほめられ方」についての意識を探っていく。

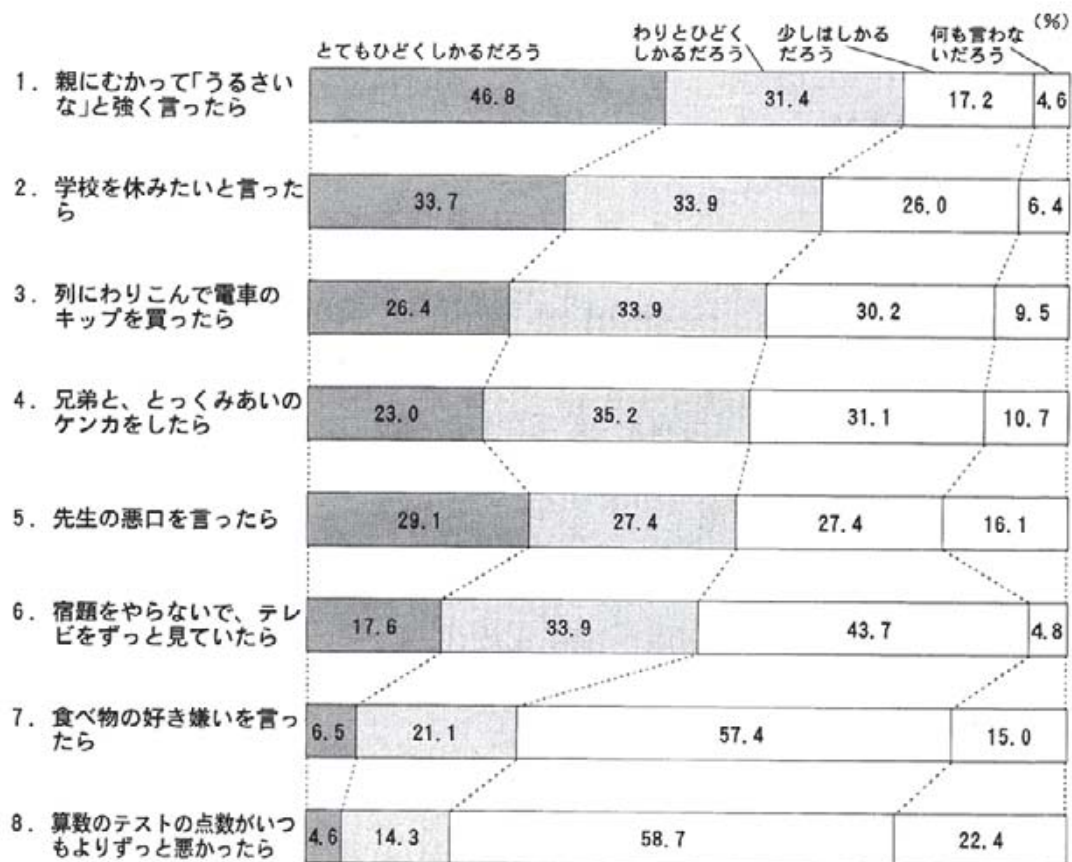
図2-1は、親から、どのような場面でどの程度しかられるかと思っているかをたずねたものである。一番ひどくしかられるだろうと思うのは、親にむかって「うるさいな」と言ったとき。8割の子どもたちが、かなりしかられるだろうと言っている。しかし3の「わりこんでキップを買って」も、かなりしかられるだろうと思う者は約半数。7の「好き嫌い」にしてもあまりしかられないというように、全体的には、親のしかる度合いは、

やや弱いように感じられる。

また、そのしかられない傾向は、次の図2-2が示すように、学年が上がるにつれて強まっていく。親にむかって「うるさいな」と言ったときでは、かなりしかられる者が4年の83%に対して、6年では70%。列のわりこみでも4年と6年では1割以上のひらきがある。だんだん親の手におえなくなる子どもたちの様子がみえてくるようである。

次に、子どもたちは親たちからしかられると、どのくらいこわいと思っているかをたずねた結果が図2-3である。こわい順番は、1位父親、2位母親、3位担任の先生。②の

図2-1 親のしかり方



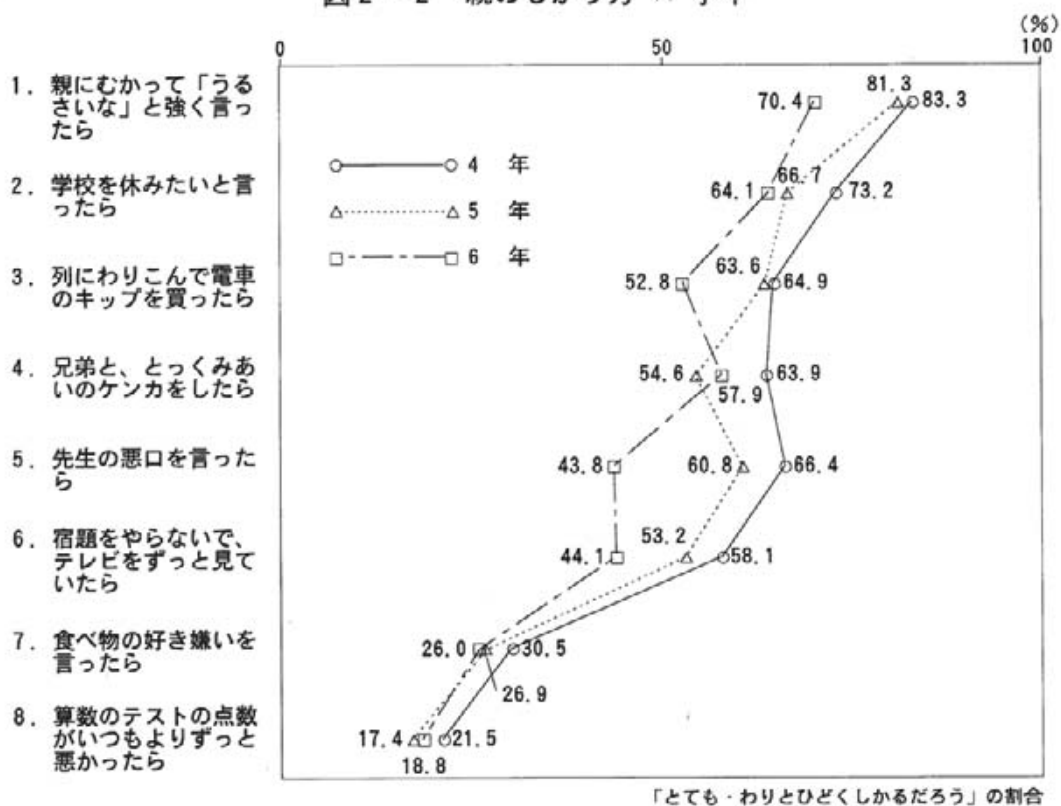
性別にクロスした図をみると、男の子にとっては父親が、女の子にとっては母親が、一番こわい存在であることがわかる。そして学年では、5年生次いで4年生が、父母や担任の先生におこられるとこわいと感じている割合が高い。しかし、6年生になると、その割合も急に下がっていく。

それでは、家の中では、父親、母親のどちらからおもにほめられ、またはしかられてい

るのだろうか。学年別男女別に整理したものが、図2-4、図2-5である。

しかられる場面では、4年生、5年生、6年生ともに父親より、母親からのほうがだんぜん多く、それも学年が上がるにしたがい高くなっていく。日常的に接触するケースの高い母親のほうがしかる場面の多いのは当然だろうが、その一方で父親と子どもとの接触がかなり少ないとも言えるであろう。とくに反

図2-2 親のしかり方 × 学年





抗期をむかえる6年生の男子に対しては、父親の役割がもう少し増す必要があるように思える。

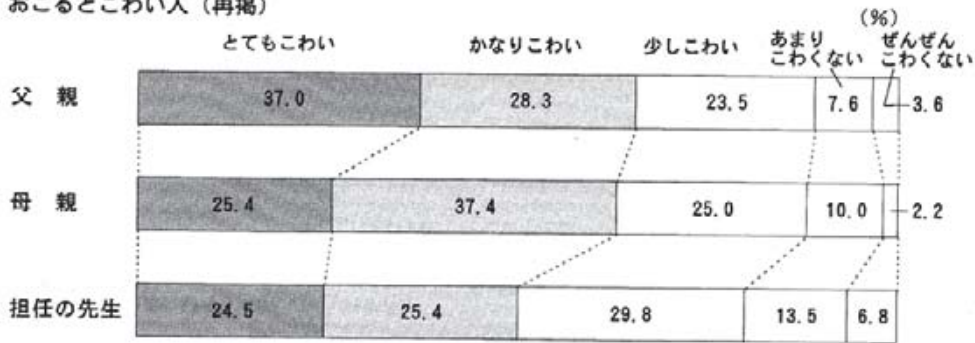
また、ほめられる場面では、図2-5に示すように、これも母親のほめる割合が父親より高いが、その数値は、しかられるときよりかなり下がる。母親は、子どもたちの生活の中で、しかる場面のほうがかなり多いようである。しかし、だからといって父親がほめる

割合が増すかという点、父親は相変わらず、ほめる場面でも、20%にも達しない。

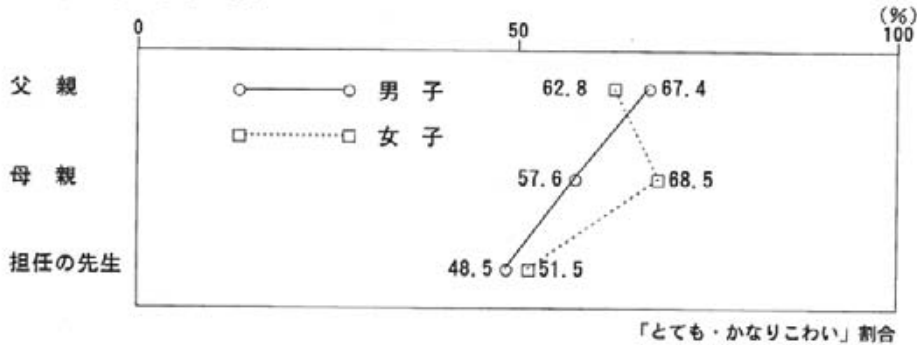
そして、父母とも「同じくらい」という子どもたちが増えるのだが、その中には、父母のどちらからもほめられないという子どもたちが多く存在していることが予測される。

図2-3 どのくらいこわいか

① おこるとこわい人（再掲）



② おこるとこわい人 × 性



③ おこるとこわい人 × 学年

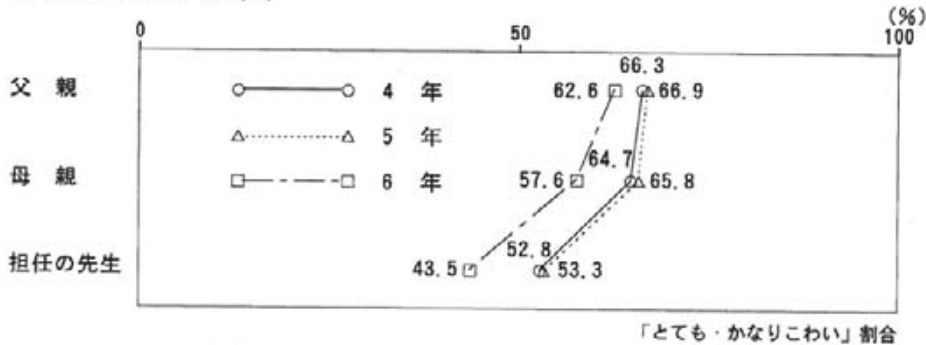


図2-4 父母どちらからしかられるか

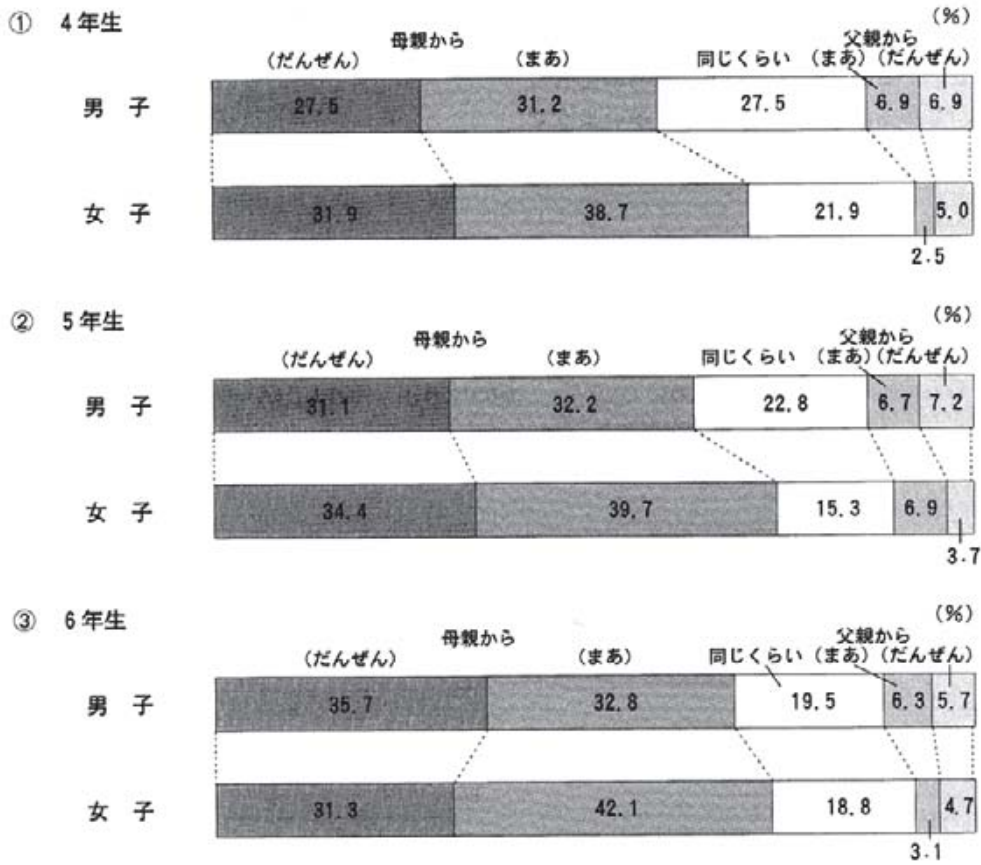
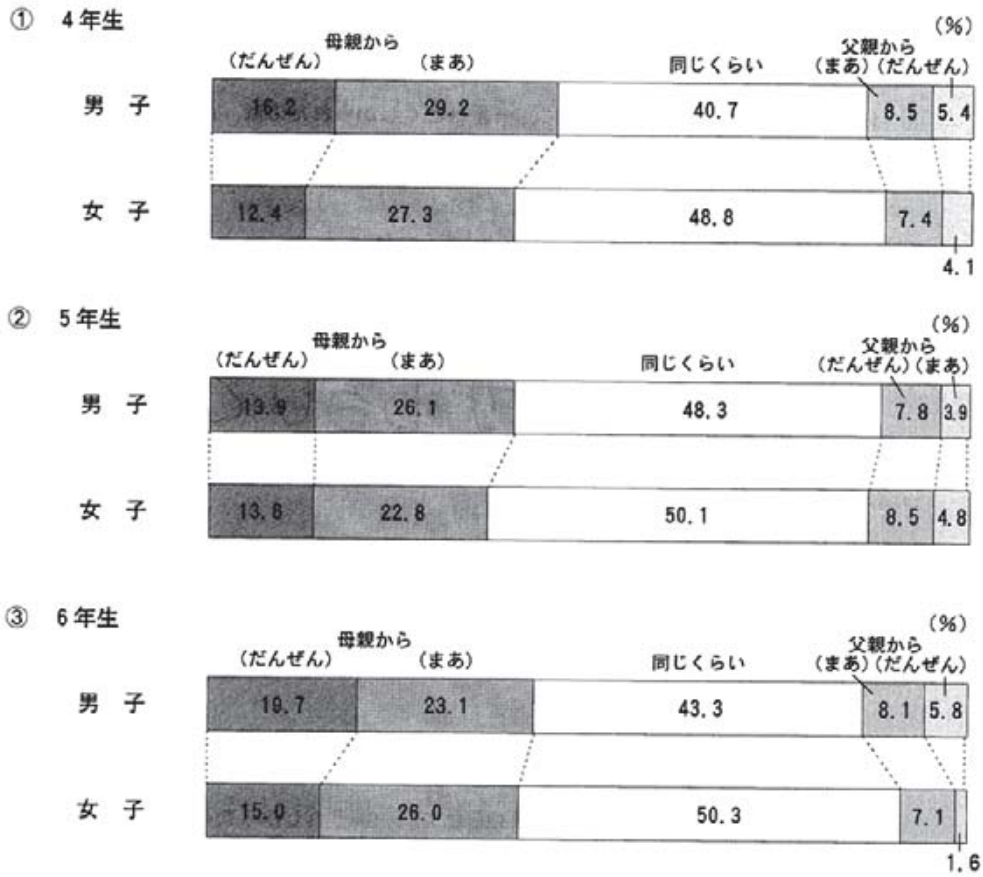


図2-5 父母どちらからほめられるか



### 3. 子どもたちの声

子どもたちには、次のような形で、「ひどくしかられたとき」と「ほめられて一番うれ

しかったとき」を書いてもらった。そしてそれを集計したものが表2-2、表2-3である。

- ③ いままであなたが、お母さんに、一番ひどくしかられたのは、どんなときでしたか。また、どんなふうにしかられましたか。できるだけくわしく書いてください。

〈お母さん〉

- ① 一番ひどくしかられたときは、どんなときでしたか。

お母さんにたいして言葉づかいがわるいとき。

- ② どんなふうにしかられましたか。

ひなたがれたり、口でちゅういされた。

では、お父さんに一番ひどくしかられたときは、どうでしたか。

- ④ いままであなたが、お母さんにほめられて、一番うれしかったのは、どんなときでしたか。また、どんなふうにはめられましたか。できるだけくわしく書いてください。

〈お母さん〉

- ① ほめられて一番うれしかったのは、どんなときでしたか。

ちらいごとの成系責が上がった時。

- ② どんなふうにはめられましたか。

「よかったね」と言われた。

では、お父さんにほめられて一番うれしかったときは、どうでしたか。

表2-2に示すように全体的には、親から子どもがひどくしかられる場面は、「口答え」や「約束を破る」「決められたことをしない」「兄弟ゲンカ」などが多い。

そしてこれを、4年生と6年生で比較してみると、4年生では勉強に関して注意されることが多い。また、6年生については、男子の場合、言葉遣いに対する注意が、女子では、帰宅の遅れへの注意がめだって多くなっている。それぞれの学年の親と子の関わり方を、また親の子どもへの心配の様子をよく表した結果である。

そして、このしかられる場面は、子どもによってさまざまなケースがあり、1～11に分類整理したものの、その他にも「のろのろしていて」とか「あいさつができずに」とか「食べるのが遅くなって」など、いろいろな場面で子どもたちは親からしかられているようである。

しかられ方については、父親、母親からともに、言葉で注意されることがもっとも多く、また、一番ひどくしかられた場面をきいているので体罰を与えられることもわりと多い。とくに、男子は女子より、体罰を与えられることが多く、父親から男の子がひどくしかられるときには、体罰を伴うことが多くみられる。一方6年女子は、ひどくしかられる場面でも言葉で注意されることが多くなっている。

しかられている場面の多さに対して、表2-3のほめられて一番うれしかったことは、

あまり場面が多くない。圧倒的に多いのが勉強についてであり、「よい点をとってきたり」「成績がよかったり」したとき、子どもたちはほめられてとてもうれしかったと答えている。テストで100点をとった自分自身のうれしさと、それをほめられたうれしさが重なり、とてもうれしい体験となって残っているのであろう。

それ以外では、父親から「スポーツ、工作などいろいろなことが上手にできたとき」、母親からは「お手伝いをしたとき」にほめてもらえることが多い。

それにしても、勉強以外の場面で、ほめられることが非常に少ないのは気にかかる。加えて、ほめられてうれしかった体験のない子どもわりと多くいる。とくに、6年男子は、父親からほめられてうれしかったことのない子が半数近くにも達する。地域や家庭の中で、子どもが活躍する場がどんどん少なくなっているのではないだろうか。それだけに親たちは、もっと子どもがほめられてうれしい体験がもてるように、子どもたちに場を与え、それを見守り、励ましていくことが大切であると思える。

勉強以外でほめられる場面が少ないせいか、一番うれしかったときのほめられ方といっても、「よかったね」とか「またがんばろうね」というような、言葉だけのあっさりしたほめ方が多く見られた。もう少し、子どもの印象に残るようなほめ方が期待される。

表2-2 ひどくしかられたこと（自由記述の集計より）

学年・性	父親から					母親から					
	4年男子	4年女子	6年男子	6年女子	合計	4年男子	4年女子	6年男子	6年女子	合計	
サンプル数	132	121	177	131	561	132	121	177	131	561	
ひどくしかられたことがない（人）	48	43	63	47	201	33	29	49	28	139	
ひどくしかられたことがない（%）	36.4	35.5	35.6	35.9	35.8	25.0	24.0	27.7	21.4	24.8	
どんなときに一番ひどくしかられたか（人）	1. 言うことをきかなかったり、口答えをしたりしたとき	11	8	27	15	61	10	17	19	17	63
	2. 決められていることをしなかったり約束を守らなかったりしたとき	9	16	16	19	60	21	18	16	17	72
	3. ケンカをしたり、兄弟をいじめたりしたとき	17	7	14	3	41	20	16	16	6	58
	4. テレビの見方について	2	7	4	4	17	5	7	6	1	19
	5. 勉強について	13	10	9	9	41	12	9	12	8	41
	6. うそをついたとき	4	4	3	6	17	6	4	9	13	32
	7. 帰りが遅くなったとき	0	4	3	5	12	4	10	9	24	47
	8. いたづらをしたり、物をこわしたりしたとき	8	3	4	4	19	9	2	3	4	18
	9. 金銭について	3	2	1	2	8	2	1	1	2	6
	10. うるさかったとき	4	5	0	0	9	0	0	6	5	11
	11. 言葉づかいが悪かったとき	8	4	19	6	37	2	4	22	10	38
	12. その他	7	8	9	8	32	4	5	1	1	11
どんなふうにしかられたか（人）	1. 外に出された	5	3	16	7	31	4	3	5	13	25
	2. 体罰を与えられた	31	15	38	21	105	26	23	44	28	121
	3. 大声で厳しくしかられた	18	31	22	9	80	21	40	18	10	89
	4. 言葉で注意された	24	27	21	43	115	26	36	55	40	157
	5. 罰を与えられた	4	0	7	2	13	3	3	6	8	20
	6. その他	1	0	0	0	1	4	1	0	0	5

表2-3 ほめられて一番うれしかったとき（自由記述の集計より）

学年・性	父 親 か ら					母 親 か ら					
	4年 男子	4年 女子	6年 男子	6年 女子	合計	4年 男子	4年 女子	6年 男子	6年 女子	合計	
サンプル数	132	121	177	131	561	132	121	177	131	561	
ほめられてうれしかったことがない(人)	46	31	81	41	199	25	20	61	21	127	
ほめられてうれしかったことがない(%)	34.8	25.6	45.8	31.3	35.5	18.9	16.5	34.5	16.0	22.6	
どんなときにほめられてうれしかったか(人)	1. 勉強がよくできたとき	30	36	32	36	134	54	36	59	39	188
	2. お手伝いをしたとき	13	5	24	12	54	18	17	28	28	91
	3. よいことをしたとき	14	15	7	13	49	13	20	9	19	61
	4. 合格したり、大会に出たりしたとき	8	10	5	6	29	10	8	7	6	31
	5. 何かができるようになったとき	5	6	10	10	31	3	6	3	10	22
	6. 何かが上手にできたとき	18	13	13	11	55	9	13	6	6	34
	7. その他	2	2	0	0	4	2	2	1	0	5
どんなふうにほめられたか(人)	1. スキンシップで	5	4	0	4	13	12	4	1	4	21
	2. 表情たっぷり	5	8	0	0	13	2	11	1	2	16
	3. ごほうびをくれて	6	6	9	8	29	7	2	9	13	31
	4. 言葉で	68	61	75	76	280	78	82	96	91	347
	5. その他	0	1	0	0	1	1	0	5	0	6

## 〈4年生の場合〉

「しかられたこと」「ほめられたこと」とともに自分が小さかった頃を回想しながら書く子は「ほめられたとき」のI児やT児のケースくらいで、それ以外にはほとんどなかった。多くの子どもたちは、最近の出来事の中で印象的な場面を書いている(表2-4、表2-5)。

しかられたことの中では「なぐられてとばされた(A児)」や「ぶっとばされた(B児)」「ベルトをむちにしてひっぱたかれた(D児)」など、相手は4年生なのと思えるものがいくつかみられる。とくに「(親が)つかれているとき、どなられた(X児)」とか、「おぼえてないけど、ひどくしかられた(W児、L児)」とか、「ヒステリーをおこした(U児)」など、親の感情だけでおこられたというものが、いつまでも子どもの心の中に残っているようでは困る。

当然、悪いことをしたときに子どもはしっかりとしかられる必要がある。しかし、子どもの心に残っているしかられ方の大部分が、そのしかられ方の不合理さはらだたく感じているのは、あまりよいしかり方とは言えないだろう。

一方、ほめられたことをみると、しかられ

たとき以上に子どもたちは親の一言一言をよく覚えている。

たとえば「すごいなあ。お父さん負けたよ(A児)」とか「どうもありがとうね。さすがは、おにいちゃんだね(J児)」とか、「ありがとう。??ちゃんのおかげで長生きできるよ(Q児)」などである。

とくに4年生の男子にとって大きな存在である父親からの「お父さん負けたよ」とか「オレができないのに……」などと言葉をかけられたら、その言葉はいつまでも子どもの心の中に残り、その子の自信につながっていくのであろう。

さらにその言葉に、「お父さんの顔がうれしそうだった(D児)」や「とってもうれしそうにほめてくれる(U児)」「本当にやさしい子ねといわれギュッとだきしめられる(X児)」などスキンシップや表情が加わると、言葉と同時にそのときの父親や母親の姿が浮かび子どもの喜びも倍増するのであろう。

ごほうびなど物を与えられて喜んでいる子はほとんどいない。やはり4年生の子どもにとっては、親の一言がとてうれしいようである。



表2-4 ひどくしかられたこと（4年生の場合）

児童	性	だれから	どんなとき	どんなふうに
A	男子	父親	こうさくのと看、なかなかかたづけなかつたとき	なぐられてとばされた
B	男子	父親	お金をもつてつておもちゃをかつたらおこられた	ふくをもたれてぶつとばされた
C	男子	父親	勉強をしなかつたとき	ゴルフ棒でたたかれた
D	男子	父親	勉強しなかつたとき、いもうととけんかをしたとき	ベルトをむちにしてひっぱたかれた
E	男子	父親	お父さんがねているときに、横っぱらをふんだとき	どなられて（ピンク）をされた
F	男子	父親	かびんをわつたとき	おこづかいもおとし玉もクリスマスプレゼントもなしだつてしかられる
G	男子	父親	お父さんにないしょでお母さんとテレビをかつた	ひどくしかられた
H	男子	母親	お母さんにくそババアつたとき	1時間ぐらゐ外にだされた
I	男子	母親	ピストルでたんすにきずをつけてひどくおこられた	2、3日ひどくおこられた
J	男子	母親	お母さんのお金をぬすんだとき	うちの子じゃないついわれた
K	男子	母親	食事の好き嫌いをつたとき	食事を抜かれた
L	男子	母親	わすれた	たたかれた
M	女子	父親	部屋をいつまでもかたさなかつたとき	はり手をされて飛んだ
N	女子	父親	もんだいがわからないとききつて何回も説明されたのに私がわからなかつたとき	何考えてんだとか、バカじゃあないのとわるぐちをいわれる
O	女子	父親	テレビの前でウロウロしているとき	こら早くどけ！ついわれてたたかれた
P	女子	父親	お母さんに「はい」とつ返事をしないで「わかつた」と（いやそうな顔で）つたとき	わかつたじゃなくて、はいついいなさい。はいと
Q	女子	父親	外へ食べに行つたとき私のメニューがきまらなかつたとき	「もう食べんとつたら」とイライラしながらしかられた
R	女子	父親	お父さんとけんかしたとき	ギーギーギーギー
S	女子	母親	何度もつわれた部屋のかたづけを何日たつてもしないで、ほうつておいたとき	部屋のすみへおいつめられて1時間どちらかした物でたたかれながら説教された
T	女子	母親	「母が悪くても父は会社につているからおこられないけど、私が悪いときは私をおこる」とつのはいけなつ	耳をひっぱられたりピンクされてたたかれたり、けられたり、なんだとこわくつわれたりしておこられた
U	女子	母親	つくえの上をちらかしていたとき	「いいかげんにしなさい」と、ヒステリーをおこした。そして、「むこうに行つてなさい」とついながらかたづけはじめた。（ぶつぶついいながら）
V	女子	母親	習い事を忘れて行なかつたとき	口もきいてくれなかつた
W	女子	母親	おほえてないけど、ひどくしかられたことはあります	口でひどくつわられた
X	女子	母親	お母さんがつかれているとき	どなられる
Y	女子	母親	いつまでもなきやまなかつたとき	地下室にいれられて、なきやむまでだしてもらえなかつた

表2-5 ほめられて一番うれしかったこと（4年生の場合）

児童	性	だれから	どんなとき	どんなふうに
A	男子	父親	スイミングで1500mおよいだ	すごいなあ。お父さん負けたよ
B	男子	父親	きかいものをなおしたり、ものつかいかたをおぼえるのが早いことと、つりがとくいなこと	きかいものをなおしたときは、「オレができないのによくできるなあ」とか、ものつかいかたをおぼえるのが早かったら「りかいりょくが、うちでいちばんあるんじゃないか」などとほめられる。つりがお父さんより早くいっばいつれると「はずかしいからオレより早くつるなよなあ」などとほめられる
C	男子	父親	テストの点数がよかったときや、つうち表のせいせきが上がったときにほめられてうれしかった	にこにこわらってほめてくれる
D	男子	父親	今までに一日も休まずに学校へ行っていること	「〇〇、よくがんばっているね」といって、お父さんの顔がうれしそうだった
E	男子	父親	習字のとき	すごいまいね、いつこんなうまくなったの
F	男子	父親	プールでしんきゅうしたとき	言葉でほめられた。食事のとき、かんぱいもしてくれた
G	男子	父親	100点とったとき	それじゃ100点とったから、100円あげる
H	男子	母親	おてつだいをしたとき	ありがとう。それじゃあ、100円あげる
I	男子	母親	ようち園のマラソン大会で1位をとったこと	「よくがんばったね、すごいね」といわれた
J	男子	母親	いもうとのめんどうをみたとき	「どうもありがとうね」と「さすがは、おにいちゃんだね」とほめられた
K	男子	母親	お母さんがびょうきのとき、ぼくといもうとでみそしるをつくったとき	「やさいがよくきれたね、なかよくできたね」とほめられた
L	男子	母親	字がきれいなとき	「お母さん、うれしーい」と
M	男子	母親	プールのしんきゅうテストで、うかったとき	「いっしょにおいわいしようね」といわれた
N	女子	父親	お父さんにプレゼントをあげたとき	ありがとうと、なでなでしてくれた
O	女子	父親	かい物について帰ってきたとき	「どうもありがとう」といって、500円をもらった
P	女子	父親	つくえの上をかたづけるのがうまい	「〇〇のつくえはいつもきれいだね。このまえお父さんのつくえもかたしてもらったけど、ほんとにきれいになっていた」とおどろいたようにほめてくれた
Q	女子	父親	かたをもんであげたとき	ありがとう。??ちゃんのおかげで長生きできるよ
R	女子	父親	「絵がうまい」とほめられたとき	人物の「目」がうまく書けているといわれた
S	女子	父親	塾の順位表にのったとき	お父さんのえ顔をはじめて見た（はじめてほめられた）
T	女子	母親	ふだんほめられていないので、いつも兄にいいじめられているのでない日に（小さいころ）	今日はなかなかえらかったね（ゆきみだいふくをもらった）

児童	性	だれから	どんなとき	どんなふうに
U	女子	母親	弟のめんどうをよくみて、夜もちゃんとおふとんをしいたとき	「ま、これ〇〇ちゃんがやったの、ありがとう」といって、とっもうれしそうにほめてくれる
V	女子	母親	まじめに集中して勉強してから、おてっだいを一生懸命したとき	「やれば、できるじゃない」という。「お母さんはおこるだけじゃなく、ほめるときはほめるよ」
W	女子	母親	学校ではしっかりやっているとお母さんが先生から聞いたとき	お母さんはびっくりしたといっって、たくさんほめてくれた
X	女子	母親	本当にやさしい子だといわれて、お母さんにギュとだきしめられたとき	女の子はやさしい子が一番といわれてほめられた
Y	女子	母親	算数のテストで100点をとったとき (いちどもとったことがなくて)	おまえは、やればできるじゃないか！といわれた

## 〈6年生の場合〉

「ほめられ方」「しかられ方」とともに、4年生が父母の言葉をそのまま記述していたのに比べると、6年生はあまりその場の状況を詳しくは書いてくれなかった。ここにとり上げたものは、その中では詳しく書かれているほうである。印象に残るようなことが多くないのだろうか。それとも思い出したくないものが多いのだろうか。

表2-6の6年生のしかられ方をみると、「いやみったらしく（C児）」とか「口うるさく、だらだらと（F児）」など親のしかり方について、いやな感情をもつ者も多い。女子では「母との言い合いで泣かされた（O児）」のように、母親と対等の関係で対立している者も見られる。6年生の場合、子どもの見る眼や判断する力も高まっているので、親も子どもが納得するようなしかり方をしないと、ただ反発だけを残してしまうおそれもある。

ほめられ方では、とにかく「成績が上がったとき」にほめられている者が多い。表2-7にも何人かを紹介したが、そのほめられ方は、「よかったねー（A児）」「よくできたね、これからもがんばりなさいよ（D児）」「よくがんばったねー（H児）」など、ほとんどが

同じほめられ方である。子どもたちの自由記述の中には、このような「100点とった」→「よかったねー」がずらっと並んでいる。もちろんそれは親子にとってうれしいことにはちがいないが、ほとんどの子のほめられて一番うれしかったことがそれでは、少し問題があるように思える。

勉強以外の場面でも、「走って一番になった」→「速かったねー」（E児）、「きれいなものを食べた」→「あら、えらかったわね」（F児）など、4年生に比べて6年生のほめられ方は、全体にあっさりしている。

それに対し、「父と母で二人でピョンピョンはねてよろこんでいた（O児）」や「お父さん感心したよ（T児）」や、成績についても、「びっくりした顔でにこにこ笑いながら（L児）」はとてもうれしそうである。しかし、このようなほめられ方をしたのは、6年生全体（308名）で8ケースしか見られなかった。

子どもはほめられると自信を増し、さらにいろいろなことに進んで取り組んでいくようになるであろう。子どものやる気を引き出し、いくためにもさまざまな場面をとらえ、親の期待や喜びを子どもに伝えてほしいと思われる。

表2-6 ひどくしかられたこと（6年生の場合）

児童	性	だれから	どんなとき	どんなふう
A	男子	母親	ガラスをわった	ビンタされた
B	男子	母親	兄弟ゲンカをしたとき	兄のオレのほうがたたかれるだけ。「お兄ちゃんなんだからがまんしなさい」
C	男子	母親	早く宿題をやらない	いやみったらしくことばで「何よ、いつもぐずなんだから、さっさとやっちゃいなさい」
D	男子	母親	本をしまわないでほっといた	本を投げつけられた
E	男子	母親	やらなくてはいけないことをやらなかったとき	思いっきりどなられて、ごはんを食べさせてもらえなかった
F	男子	母親	うそをついて親の信頼を裏切った	口うるさく、長くだらだらと
G	男子	父親	お父さんの足をふんだ	思いっきりなぐられた
H	男子	父親	ドアをあけっぱなしにした	なぐられてけとばされた。「何度言ったらわかるんだ！」
I	男子	父親	いうことをきかないとき	「ちゃんということをききなさい」
J	男子	父親	集中してまじめに勉強しなかった	外へ出された
K	男子	父親	勉強しているときに他のことをしていた	頭をひっぱたかれる
L	男子	父親	食事をして食べ物をいっぱい残したとき	「どうしてこんなに残すんだ。食べないなら食べなくていい」
M	女子	母親	机の上がきたなかった	どなられた
N	女子	母親	帰ってくるのがおそかった	平手打ち2回
O	女子	母親	兄弟ゲンカをしたあと、母と言い合いになった	言い合いで泣かされた
P	女子	母親	お母さんのいうことをきかない	口で注意された
Q	女子	母親	受験勉強がイヤで「死にたい」といったとき	「まだ、小学生のくせに何いってるのっ！」
R	女子	母親	おそく家に帰ってきた	おこづかいをへらされた。「よそのおたくにもめいわくでしょ」
S	女子	父親	弟とケンカした	ぶつぶつと文句をいわれた
T	女子	父親	宿題をやらなかった	「しっかりしなくちゃだめじゃないか！」
U	女子	父親	勉強でわからないところがあったのにうそをついていた	「なんで、こんなところがわからないんだ」
V	女子	父親	父の悪口をいった	ぶたれた
W	女子	父親	かぜをひいていたのにクッキーを作っていた	頭をひっぱたかれた
X	女子	父親	約束を守らなかった	カミナリが落ちたようにおこられた

表2-7 ほめられて一番うれしかったこと（6年生の場合）

児童	性	だれから	どんなとき	どんなふうに
A	男子	母親	学校の成績がよかった	「よかったねー」
B	男子	母親	テストで100点をとった	「すごいねー」「がんばったねー」 夕はんにすきなおかずを作ってくれた
C	男子	母親	何もいわれなくても手伝いをした	「まー、うれしー、ありがとー」
D	男子	母親	テストで100点をとった	「よくできたね、これからもがんばりなさいよ」
E	男子	母親	走って一番になった	「速かったねー」
F	男子	母親	きれいなものを食べた	「あら、えらかったわね」
G	男子	父親	お父さんの肩たたきをしてあげた	「ありがとう」
H	男子	父親	テストでいい点だった	「よくがんばったねー」
I	男子	父親	運動会で白組の団長をやって優勝	ことばでほめられた
J	男子	父親	手伝いをした	「すまんー」
K	男子	父親	自転車にのれるようになった	「上手になったな」
L	男子	父親	成績がオールAだったとき	びっくりした顔でにこにこ笑いながらほめた
M	女子	母親	成績が上がったとき	「よかったね、やればできるじゃん」
N	女子	母親	何でもすすんで手伝いをした	「ありがと、また今度もやってね」
O	女子	母親	区のマラソン大会で賞状をもらえた	父と母で二人でピョンピョンはねてよろこんでいた
P	女子	母親	成績がクラスで上のほうだった	「よくがんばったね、またがんばってね」
Q	女子	母親	スイミングで3位のメダルをもらった	1000円のおこづかい
R	女子	母親	字が上手に書けたとき	「お母さんよりもうまいわ」
S	女子	父親	テストで100点をとったとき	「よくがんばったね」
T	女子	父親	ピアノの発表会でうまくいった	「とってもよかったぞ、お父さん感心したよ」
U	女子	父親	成績が上がったとき	「がんばったね」
V	女子	父親	テストでいい点をとった	CDラジカセを買ってくれた
W	女子	父親	そろばんの級が上がった	「そりゃ、がんばったなー」
X	女子	父親	成績が上がったとき	「よくやったな」と頭をなでた



## まとめ

しかる、ほめるは、子どもを育てていくプロセスであまりにも日常化した行為なので、われわれはつい細かい配慮を忘れ、習慣的にそれをしていないだろうか。

しかし、2部の子どもの声を読むと、子どもたちが、おとなの口から出る「ほめる・しかる」を全身で受け止めている様子が印象的である。何をしかるか、どうやってしかるか、そしてしかった後のフォローをどうするかは、限りなく難しい作業として、子どもの成長の過程で、親の最大の課題であり続ける。それを胸に刻む必要があるのではなかろうか。

そしてその過程では、母親と父親の強力なチームワークと役割の分担が必要なことは言うまでもない。いま子育てが男性の生き方の中に新しい行為のレパートリーとして加わる時代になりつつある。

